

小夜帳

五

内閣文庫			
三 函	二 〇	二 一 五	類
四 架	冊	號	類

内閣文庫		
番號	和	2105
冊數	20	(5)
函號	220	69

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 2

小役帳

五

庫 文 同 内			
二 函	二 冊	二 冊	二 冊
四 架	冊	號	類

内 關 文 庫			
番	號	利	2
冊	數		
函	號		

寛政二戊午

小役人帳上

家入名簿



寛政二戌年

正月十二日

種形若根源者格唐

大木令如然

吉山三右衛門組出宛

比企市席右馬

勤山内華一通西屋言多事

右云 作付名所焼火間系於

浦前当中渡若事列列座

右為批
中
後

[illegible]

出入之役書

志在東門鉏鉏

比企市節石

三十R

本

種非若授沛青括沽爲一人之明跡

分

右對馬弓殿
右同出

高武振德堂人車技指

少雲居組坪内式歌組

德星平翁

高橋家系之人事技書

流星源流

此書は高橋家系之人事技書に
流星源流を記す

右源流記は安永七戌年閏七月廿日
後部金谷佐面守長と井上清吉同
年 石山市切米橋六條之人事技書
より重南村松岡組江村組江村
組より父平次郎成玄十二月病死仕

流武源流記より重源流記以来
市切米橋技書より上より江村父
平次郎元市面守長岡人江村組
より通源流記より内並より江村
技書より江村組より江村組より
江村組より江村組より通源流記
より重源流記より重源流記より

戊辰月

江村源流記

右戌三月十二日伊豆守殿より
右へ送る

右迄

稻葉多文組内迄
中神次

右是田清助沖用書物手傳書物
以在二書中渡以右清助一書渡以

右目付

右迄目付
市々席畔
飯田重次席

同文

是田清助

稻葉多文組内迄
中神次

内記司分
市令席畔

飯田重次席

右沖用書物手傳抄動以紙中渡

以号切之云内月内流記一云漢以

右戊二月十日傳書物手傳抄動以紙中渡

内月内流記

稻葉多文淵院

中井順次

内記司分

市令席畔

飯田重次席

右墨田清助沖用書物手傳抄動

以紙中渡以奉

右同日越中寺殿より内例元近之云々

一墨田清助より各系書物預書物云々

正徳市山巻市人

正徳市山巻市人

全代太師在

右葉狀書由中用書如手傳抄物
以紙一紙中流以花衣物一紙流以

葉田書物

正徳市山巻市人
全代太師在

右所用書如手傳抄物以紙中流
以寫紙之云正徳市山巻市人
誤以

右為通正月十二日海常寺殿より西流

正徳市山巻市人
全代太師在

右葉狀產物所用書物等係抄本
以紙中一海心事

右同日越中より所例先通致す料法のみ入
一彦卿より右名系中上

二月十六日

堀田氏常務組
大内番組
布施八常務組

大内番
小多肥塚組
佐々木氏出

勤以円筆一通出是言なり

右に 作付各段に右中郭金
後秋浮夏中一海常中列産

右為和 女 中渡

一前日之れ

一堀田氏常務より明十六日四付右より紙書付

右渡

高現未接石
又人校抄

信德代第百二名

信光
心平信德子祖子力

神吾源之傳
為成二十歲

日人傳

神吾大代
面成二十歲

右神吾源之傳汝去申十月中

抄書一將疾者長為所難於成
之是眼病多眼眇活也之書生
仁以切有收氣仕神年公一也物所
空所度者代也預以智是以味如
右之病疾也遠之也所度以才教之也
將神吾大代也書代也
神吾源之傳汝去申十月中

正月十八日

心平信德子

分札

一為預之通

右戌正月十八日海軍省發下同日分札洞
右者代預之役源之傍一代之希抱
以之身當代之取給以之直之
三月九月海軍省發下同日分札洞
有之身當代之取給以之直之
小役人帳之為

正月廿二日

西元正統元年組
川村助左衛門
心之重臣之役

勤之月之來之正統元年之役
之役

右者 作之身當代之取給以之直之
為之身當代之取給以之直之

一七 中 渡 九

市動定年録

市動定年録

友田津太郎

市動定年録

市動定年録

市動定年録

市動定年録
市動定年録
市動定年録

市動定年録

市動定年録

市動定年録

友田津太郎

市動定年録

市動定年録

市動定年録

作分級令初年教三振武年九月
方由勅定武振武年九月

高百の振振

内百の振振武振武

内勅定組以
父薩本二條門元
内勅定
薩本源家
成安十一年

天明四年辛酉正月少重慶一内勅定
作分七年九月

一遠回中用一夜江戸中用二夜

お初中

祖父父自才遠急通寒内門往

以後云内門往

右諸侯席源飛後常江戸中
全情急実振お初中勸中
右天二内府以男右為人内世友友
是助流内情中内勅定組以

作身並一通出外科百表之下重
以秋仕夜深分九張

作身以主並一通出是言とて系
並以秋仕夜深分九張

成
正月

柳生全悟心
久世丹後寺
根原肥前寺
久保田次渡寺

曲園甲斐寺

何月札

年数小も有るに写初年と云

下中渡寺

右戌正月

紙中寺殿書何と云初年同日

何と云海下と云面仕同廿七日返上

書向同色紙八帖

一丁名長作後水知信

正月廿九日 津保長月

中八日身

平清左衛門

飯山友太郎

佐友九郎

津田健右衛門

木村嘉友次

西村六之助

室田富三郎

宮崎若八

田原川信太郎

西元

古山人月身

友田勇八

右之由勘定不申及出少人目付に候
以來申事元之由引替に候事
主作渡山由事引替に候事
右如少由引替に候事
右如中引替に候事
右一仕引替に候事

正月

津保嘉内

右戌正月廿九日海部省殿に出書に付相成候事

右書面申上候事

二月八日

右勘定組次

右勘定

小出人助

勤以月並に通し置候事

右之由 作付合候事
丹波守中渡部中列座

一 右惣括 一 也 中 渡 花
 一 去 丙 子 月 十 九 日 度 日 次 公 卿 例

書 面 一 出 云 國 書 中 信
 昔 物 後 江 渡 某 一 点
 在 何 處 也 其 作 爲 形 如
 此 也

二 月 十 日
 桑 本 善 房
 中 川 初 三 郎

此 云 國 書 中 一 以 書 一 同 年 本 出 來
 公 出 轉 本 初 以 名 一 伴 部 金 佐 助
 一 出 云 國 書 中 一 以 書 物 後 江 渡
 別 氏 一 通 大 用 二 郎 年 山 川 中 總 公
 此 月 才 物 後 江 渡 中 何 以 知 同 一 也
 一 也 伴 才 定 一 形 一 外 一 後 江 渡 人
 中 一 渡 金 佐 助 一 父 子 兩 氏 仕 任 諸 公
 父 一 不 收 一 保 上 將 治 事 為 後 一 月

高田様へ名へ畔後後へ後同へ
カ一後来は御事あるに後へ後へ
宗人共へ御事あるに御事あるに
中上の通文へ後後へ後へ後へ
お成又へ御事あるに御事あるに
内とお成様へ御事あるに御事あるに
氣清七も御事あるに御事あるに
おへへ御事あるに御事あるに

も御事あるに御事あるに御事あるに
おへへ御事あるに御事あるに御事あるに
おへへ御事あるに御事あるに御事あるに
おへへ御事あるに御事あるに御事あるに
おへへ御事あるに御事あるに御事あるに
おへへ御事あるに御事あるに御事あるに
おへへ御事あるに御事あるに御事あるに
おへへ御事あるに御事あるに御事あるに

長井山後身人教ふる制方より
而兼下中水と事なる名一に成
候、此北より中水人目才三組
ある人々助役役六人
作後より中水仕方なる名一に成
と云、同番中より番より中水人目才三組
勅より中水一人中水役なる名一に成
と七年末にお勅より中水人目才三組

此所より中水役なる名一に成
此より中水役なる名一に成
才威より中水役なる名一に成
中水役なる名一に成
中水役なる名一に成
中水役なる名一に成
中水役なる名一に成
中水役なる名一に成
中水役なる名一に成
中水役なる名一に成

介生茂八

龍又三年但
同又花牌

市人目月

池田十龍

高橋是重組
中又番又花牌

市人目月

志願市

右三人之各所立関書役中渡夜舟

松山

川村嘉右但
中又番又花牌

市人目月

三根沢又市

龍又三年但

同又番又花牌

市人目月

木村海右

高橋是重又但

同又番又花牌

市人目月

第拾八席

右三人之中、上番役、中番

役、下番

右一者、世傳、中番番中、上番

役、中番役、中番役、中番役

天保二年

二月

小川中役

二月二日

中役

高木中役

中役

中役

中役

右一、作、中役、中役、中役

大膳、中役、中役、中役

中役

中役

中役

中役

大市番下云甲斐守兼金目守
組人数不足三月五人

中書院組

坪内式部守亮

富田元亮

今川貞房守亮

廣吉久保守亮

近江浪義

若田安房守亮

牧壯健守亮

南郡守亮

山崎守亮

膳田安房守亮

廣原祐三郎

松平信清守亮

中川十右衛門

高木元治守亮

小西永祐三郎

柳宗留家

阿部越前守家

伊东家

石河家

横山左膳

久保源兵衛

御地保源守家

石原政八郎

石原 作才左衛門菊一 同縁親

丹波守中渡常平 列座

石原 忠 中渡

一大書院 和歌巻 一 中渡

大書院

中渡甲斐守家 長門守組人 叙
石原 忠 入人

右名不義潤

右一通云 仰身

右月書丹波寺殿西渡

二月十一日

評案為役
万幸三宅

羽田友右衛門

数事格別出格お初よりお初之
組以格云

仰身只今通てお初より人
技持え出技持方増すなり

右新出右子部金部新丹波寺中渡

知中列座

右如和 七 中渡

世に此勅定組以明有し此年此勅定
し内しお急し人書し一
海し此勅定評定而後万年
三左衛門羽田友右衛門あ人し別氏
し近年教もお勅所用向切を
此中組以

作身しお急し之の此所
し右あ人し内し中し評定

し此勅定組以明有し此年此勅定
此年此勅定組以明有し此年此勅定
又し此年し此勅定組以明有し此年此勅定
此勅定組以明有し此年此勅定
又し此年し此勅定組以明有し此年此勅定
又し此年し此勅定組以明有し此年此勅定
又し此年し此勅定組以明有し此年此勅定
又し此年し此勅定組以明有し此年此勅定
又し此年し此勅定組以明有し此年此勅定
又し此年し此勅定組以明有し此年此勅定

大遠沖定書を并例おし年来
多掛由観定に後巨細おし
中し向う古勘定なる由用向う美
に扱ひるものも新観留候に
御付しるもの二年なるもの
丈更に由用并し経るもの
は各年古切名成なるもの
も并立しるもの由用古文
を

以下に前書に通付今に
し由用并し今に三日年
事別
中し向う古勘定なる
もの由用向う美
に扱ひるものも新観留候に
御付しるもの二年なるもの
丈更に由用并し経るもの
は各年古切名成なるもの
も并立しるもの由用古文
を

在焉も厚き作派も有るに聞之
し及ん難き教と申さぬ人々あり
と被取おし後お教へ申さるる
此府の地は格別と思ふと出精は
能く申さるる中より此府も増
面一統の害も有る中より書
為人古く是も言ふと此府も
此も一筆教は此府の地は精

一親極申さるる中より此府も
技指え増し技指え申さるる
格と 作付申さるる中より
此府も申さるる中より此府も
一例も申さるる中より此府も
何年申さるる中より此府も
此府も申さるる中より此府も

戊辰月

柳生之悟心

久世丹後守
根家肥前守
久保田左衛門
曲園甲斐守

同列

書面之由は解法に文場を
為勵すは所由に動定を以
お給ひぬあるは動定組に格

七 作才面役勅し内膳人
技持え増し技持者一と云

作才面役

万幸三左衛門

右取才之能合武格武々年し内
面役助し面役勅年教格七々年

日

羽田友右衛門

右京之部合指方年二月南段助
一留段勤年教十三年

右通三内府公之

成心月

柳生全勝心
久世丹後寺
根家肥前寺
久保田依波寺
曲淵甲斐寺

右目付

系族之
在分川第第馬

右三九明地普明結一二年渡
右倉地改之助一二年渡

倉地改之助

同文云

中後山を以て目下二二後山

右戊二月十二日令部捕頭近後一

一第日由他事

此上書外云託
法書院方云云

出切未指儀

寺人持指

次席云

戊子歲

右病氣三月由來之由勸業由服由新
以三月由服由是右明法尼介多由海
以三月由服由中三月由服由三月
由服由新由云

二月

明樂嘉方更

金子之在東

分札

二為預之通

右成二月廿四日大膳亮殿より同十有分札調
上

小菅清組支配

石河重隆組
加友右衛門

右達池内合衆番同人の明証
其申渡山元勘定奉行一紙候

山勘定奉行

同文
申渡山元勘定奉行一紙候

右付二月十日和泉寺殿出渡一書常一日書
出

二月十六日

旧拂灯事

表火一書

雨宮半八

是日令八弟送

勤以月無一也此是言事

右云 作付台於焼火間事

大悟庵中渡若年寺別所

右惣和 一也 中渡 少れ

小書落組支配

清龍寺渡名組

荒川光文

右譯定市田人一人一明寺渡
中渡以尤正勘定年外一渡

正勘定年所

同文云

中瀬山小巻清組宛
一紙漢山

右二月二日和泉寺殿内海一

中瀬山書付

中瀬山書付宛

荒川 宗之丞

右評定不同人一人に明記中付山

右月海寺新補殿上和泉寺殿より内海宛

中瀬山書付宛

中瀬山書付宛

中瀬山書付宛

高瀬山書付宛

外紙授付宛人書付

右書付宛人

中瀬山書付宛

戊子二歳

右安江東の氏病氣初妻身世及
此帳を頼み頼み通此帳より重
いへ右安江東の畔源義成此年之
一おぬおぬと名をいふ事を見
勤お頼重いなり此度此安江東の年分
此近数年平将急実解お助此度
之上元介多此度此安江東の年分
貴い畔源義成父安江東の年分

此切米此技術方改技術方此年重
父流此此入此 此年此年此年
元介此年此年此年此年此年
此此此此此此此此此此此此

二月

石井遠江
伊友河内

此札

一為頼通

右戌二月十二日丹波守殿より牙乳調上七日左
 一右乳抱入し後右陽市に倒すし牙乳
 以て大月八申十月六日病死治す時
 此抱入し後お乳を食し何有し抱入し後
 お母の側より世に世に何と云ふお母
 此後此後此後此後此後此後此後

小菅氏組支配

清井氏より組
 元正統組に和知組あり
 小菅氏より 作す

孫多清井

人見門次第

十一

右門次第此後此後此後此後此後此後此後
 此後此後此後此後此後此後此後此後此後
 此後此後此後此後此後此後此後此後此後
 此後此後此後此後此後此後此後此後此後

法悦院

同文之

中瀬山智小書院組
支那一書院

右丹波寺殿主山入悟之元殿山渡一

小書院組渡村佐海寺組

元文四庚申十月廿七日山渡
早川情七郎組山抱金
作舟山切米七信儀之持持

高七信儀

山人持持

元中延元後田金山右馬
組一良明和三年十二月
十二日相田金馬組山以
元 作舟山切金山年
山初山切山并山金馬組
山山山山山山山山山
小書院入

人見孫之持持

成藏七十二

解了

法光寺素年寺傳祖

久村安太郎

成藏三九

右安寺中法明和元年

八月吉日焼香在太

組に抱入

作すお初に去時

人見門次郎

成藏十三

右源寺傳法以別成中上以通

病死仕山月元正抱入く名に成度山

法目新山中く山能寺来久安お海

山名に成寺く元介も成度山月一

お成海に成度山く山成憐愛つ第

成お海に成場山に抱入く作す

山名に成海に成山に抱入く

二月七日

浅井佐渡守

何月礼

此後組以初勅當時小書院為
右主以久病死由是長子時治
三人二抱入中一名是年而何
右海以有書句一見之此後
此後三人二抱入中一名是年而何
右成三月九日丹波殿一由何年或曰十日由何
一色海内書才由海一海

二月十六日

御書院
此後不中書院人

御書院此後不中書院
横井三之助

勤以月並一由何年或曰十日由何

右主 此後不中書院人

若年者列座

右主 此後不中書院人

出入人ノ後書付

拾三條

寺ノ人ニ書付

沖島振込帳本ノ巻

横井三ノ物

三十七

右

沖島振込帳本ノ巻ノ人一人

明治二十一年

右二月十日御前書付奥ノ上ノ有

二月十六日

此教書金

村沢宗長

此教書金坊金

白沢林葛

勤山月並一通此書金

右此 作付金此右金

海教丹波中ノ海ノ金中列

若年金中列

右惣北 上七 中渡

法教寺金匠

法教寺金匠之組

林 葛

右明十六日四時

沖城上之長

二月十日

小菅清組支所

前田安房守組

長小津家

右町奉行組同人等へ
一文中渡は右町奉行へ
一文中渡は

町奉行

同文云

中渡山より小菅谷に渡り
一文字云

右二月十日丹波より教田渡り

中渡山書付

小菅谷組番安房組
是に付云

右町奉行組同く一人、明日に渡り

中渡山

右二月八日丹波より教田渡り
上云

寺新山通組に渡り
此等より中渡山
より渡り云

二月七日森山忠三

西切末七種像

此猶祖以地抱

若海老十郎

或二十九歲

六人技持

四

或猶依或人技持

元亨

或猶依或人技持

此猶祖以地抱

右老十郎海延享元子年二月出所
方明法以地抱入其成室曆八年
十二月出所吟味改冲腰酒改出青紋

華紋也

作才無一過此是之

其子也其初明和六子年十二月

出猶祖以地抱

作才無一過此是

高由是技持其子也其初明和六子年十二月

公初合其初七年其初中其初也其初

不其初也其初也其初也其初也其初也

收氣其初也其初也其初也其初也其初也

其初也其初也其初也其初也其初也

仕新正府山所影之通光全
作身平下重以依仕度年影山一

戌
二月

森心君之席
上清二弟右馬
松田小云清
間文平右馬

右大膳亮殿下書面之通光全

書面之通光全

但安永七年二月堤之右馬例見各

表取卷下所

達光院横山卷下所
檔中右馬

右

達光院横山卷下所

明治二十一年中渡山勤山内並に
古長三子下山文原もて中渡山

右三月廿日大膳竜殿中渡山

中渡山書付

蓮光院横山麓市少宮寺

橋本少宮

右

蓮光院横山麓市少宮寺
明治二十一年

明治二十一年

右所成二月十九日大膳竜殿
以系内例元日書面一紙由總合海軍

高三様儀三人持持

小寺原方子氏
法抱入る
平井惣兵衛

右惣在東の役之年中より由一症
お然也く養生仕はれども此年公親
お勤由暇お然より吟味仕り
病状お違ふ所程は頼く通由暇
より下り仕度申されしに

戌
二月

小菅清方

右一通小菅清方書口より和し牙

杉又吟味仕り候と相違ふ所程は
候し由暇より筆より紙中へ渡り
入し候と吟味仕り申上り候

二月廿二日

飯田龍光
高井八郎

右戌二月廿二日大膳亮殿より為仕置し

元明地書
松崎傳次郎

高松武徳
寺人校持

右傳次郎傳次郎平日出守之出精實解
其初中以爲世及古休志出守之志
永井与市役商上月自守其記
其後三三 傳次郎人明寺中以爲
右明流之志一通右傳次郎傳次郎

傳次郎入人出 傳次郎不志其
伝次郎志其志

十月 倉地政之市

元

一乃新通

右傳次郎 日付元調古

はる子
安部平吉宛

石川本庄

市澤代第... 文... 八...

国文云

去八月中... 腰痛... 暈...

二月廿二日

安部平吉

乳

同日

右二月廿三日... 乳...

書面... 乳... 石川本庄... 安部平吉...

二月廿五日
書名長之場
中川勲三郎

西玄園書中一書後以、後以來
お上り存立作、後以來、後以來
お伺ひ

西玄園書
定人数
武信即人

西玄園書
定人数
武信即人
お上り存立作、後以來、後以來
お伺ひ

南丹右ノ人数ニ所産ノ多ク其
法玄國番中ノ一書本ノ説明キ
過人ノ少録上ニ爲法ハ彼ノ過人
有メ内ハ出入ノ法ナリ一法
此種ハ就テ多ク稿是ナリ組ハ彼
方ノ人ニ所産ノ多ク是ナリ組ハ
本説明キハ一出入ノ法ナリ上
手ハ右ノ法ハ一法ハ出入ノ法ナリ

預ハ此ノ法ハ一法ナリ是ナリ組
第ニ多明キハ此ノ法ハ一法ナリ
法ハ此ノ法ハ一法ナリ是ナリ組
本定所ノ人ハ此ノ法ハ一法ナリ
爲法ハ此ノ法ハ一法ナリ是ナリ組
是ナリ組ハ一法ナリ是ナリ組
何ハ此ノ法ハ一法ナリ是ナリ組
法ハ此ノ法ハ一法ナリ是ナリ組

一同修撰仕り受書面し色紙付し
修し中川中川

二月

衆承若云書
中川勘三郎

△中川

川口嘉右衛門
古玄園書
接武人

月如後
三人
武人

金井室弟組
古玄園書

同
三人
三人

三橋室弟組
古玄園書
六人

○ト九

内助役
寺
人

川村嘉右衛門
中
九

九

人

同

三人
三人

金井定次郎

中
三

人
三人

口ト九

内助役

寺
人

三人
三人

三橋元次郎

中
二

人
二人

内助役

寺
人

知又近き園書中へ著す如く
明きいふとて人より集むに仕
て人等組第ふ如く明き
いふとて組へ集ふ人といふ入
人にて仕へる名お同し如く
明きいふとて人等組第
外組へて人といふ集むに仕
る又方へるあはれに集むに

本年天明六年第一西丸新へ
文既向

沖田丸に云 名をいふとて
あはれに集むに仕へる
如く明きいふとて人等組第
勤王の中へあはれに集むに
いふとて人等組第ふ如く明き
いふとて人等組第ふ如く明き
いふとて人等組第ふ如く明き

今組ハ外組ニシテあはれ
 人数少シ此所ヨリ外組
 三人ヲ繰上ニ仕留ハル人
 組筋ノ事人ハ勵ミ居ケル
 有リ此ノ全ノ紀ノ事ハ勵ミ
 成ル事トシテ泥ミハル
 在月ノ内ニ此所ヨリ外組
 三人ヲ繰上ニ仕留ハル人

以テ三人ノ事ハ此ノ組筋
 名指シテ明キ事トシテ繰上
 有ニ仕留ハル人ハ勵ミ居ケル

二月

東京市警署
 中川勘三郎

高ニ格依テ人技持

小菅屋方氏
 氏抱入
 平井惣右衛門
 明治三十四年

右より先達の中上は小菅清方と代
 平能忠房の明証は右忠房の弟は
 比切末由枝持方と云凡介は右忠房
 忠房の弟は入中流の海一中古堂

戊二月

小菅清方

飯田徳光
 吉井大隅

比切末由枝持方
 比切末由所由
 比切末由所由

元方
 比切末由
 比切末由

年始白雲の箱
 月並市礼長

比
 市

右より先達の中上は小菅清方と代
 平能忠房の明証は右忠房の弟は
 比切末由枝持方と云凡介は右忠房
 忠房の弟は入中流の海一中古堂

和光に頼書及中より丹波に金門
頼通中流山

沖目通りも丹波山名に丹波山丹

中上公望

二月

小栗又云勝
宇田川平七
勝金権吉美
上左衛門源太郎
中膳利右衛門

右成二月廿二日大膳元服より丹波に上

二月廿六日

大膳元服より丹波に上
丹波に上

右病氣より頼通に及り丹
波に上丹波に上丹波に上
丹波に上丹波に上

右巻 七 十後

一商人新書字并改活新書元書句一紙果

作本一

右巻 新書綴紙

中後 丹波守中後
列府云々

右巻 新書綴紙

人書米倉長子御宗

右巻 新書綴紙

右巻 新書綴紙

通正 改書先云云

人書書頭

米倉長子

明其百官付

河城子亦不可多生之山

二月廿七日

右丹波子殿古渡一

小常陸組之配

大田者来奈也乃組之
相承之弟也

右病氣之牙預之通山波沙光

小常陸入之 作牙以骨何之配

一入之尤大出着以て多生之

右古月人古渡一

出教事全江

林高将

白沢宗寿

部全役
出切来武振儀

戊午三歲

右宗壽父林高以貧出教書為生
其 作才以才因役事也其性以才
宗壽後出信改事先出切來登
出教書金見其書中其公其
作才其下以衣其類以之

二月

宗 永
松 栢

見

一為預之通

何其礼

例也方之出教之通

一十海

例書

法華寺
宗知牌

山切末或指儀

横山宗在
三十一歲

右宗在父宗知大用己年十二月
七日法教部全匠
作付山月因收並後山所山月
山右仕之役沙光山切末法教
寺全見為山年云云

作付山月山右仕之役沙光山切末法教
寺全見為山年云云

右戊二月廿六日大膳亮殿
山切末通海十廿八日山月山切末

山切末

西尾和
山切末通海
山切末通海

右西九室助勤吟味役一文中渡り
勤以内出是言之外文中物吟味役
並一通り中り各一文中場を意ひ

右成二月廿八日大膳元殿出渡り

一右出納江より各出納預書書面一紙出納元
出是合一上出納元出納元及

但左一三例元是近出納元出是合
及及出納元出納元一紙出納元出是合

一右出納元出納元出納元出納元

明和六年三月廿七日永七年

四月廿二日

出納元

出納元出納元

完同長元

右出納元出納元出納元出納元

一、市中渡山勤山内並一通七種
八人扶持ノ後ノ事如平山名千原ノ
一、市中渡山

右成二月廿九日大膳元服出渡一、右右新書
一、所例元ノ出御金出渡一、一、所例元
不及

一、右新書ノ内ニ出春御物出諸組
御身元平山名千原ノ有一、山平山渡一、山書身

一、内ニ出春御物出諸組一、一、右渡山
難中ノ身元例元ノ出御金出渡一、一、所例元
一、出春御物一、文之書一、山平山渡一、一、
山平山渡

安永七戌四月六日迄永平平山名千原
浦村至平山名千原二月廿日迄浦村七
例也

二月廿九日

此教寄金坊之銀

林高弘

此教寄金坊之銀

林 頌

右云 作才名於源濁間春心
大略之龍中源若年寄列座

二月廿九日

言家

人友武部補

六角越前守中源山城守同列

云 作才年一通改料

云

右於其著間丹波守中源

智中列座

右思和 右如創月書由一名法名字及

一 右主出連月也安永四年三月六日
 越前守同九月子年八月四日中條山城守例
 見合を執留も出及次々々々々 作付
 一 述る所々々々々々々々々々 作付
 此一也

同言古二年銀境三々々
 主出連守例出役

比企市年々々々々々
 秋永又次席

右主正月十二日主々々々々々々々
 種姫若様出待々々 作付右明々々々
 出流三人々々割入仕々々々々々々
 之

二月廿七日 出流 以

右二月廿七日大膳元服不為仕女了

小菅清組支配

東田安房守組

小沢新之助

右由細之而同一人として用事治す
其中渡山由細之派一と候也

由細之派

同文云
中渡山小菅清組支配
一と候也

右二月廿八日大膳元服不為仕女了

中渡山書付

東田安房守組

小沢新之助

右田畑之不同人一人之明也
中付山

右二月廿七日之祭神歌一山鹿出

年終山光

言武儀
非人様

右天徳寺の
早稲十束の御恩
右抱入
石川忠兵衛
戊午七月

右忠兵衛の没々園月十旬より
持病一症積累致お病臥中至
去西九月中旬より腰痛治癒
難仕所産山名也一若生仕山名
以今因産子至壯氣仕山名云
お勤病安産山名一山名云
山名云山名云山名云山名云
お遠安産山名云山名云

長 作身事下り花散れ花散れ
古法由抱入し海を渡る一し一し

戊
二月

此う夫港なり
早瀬十有頃

右 通由乃夫港なり早瀬十有頃
中 波の宮中上は石川忠成の影を
世 帳に下るに花仕度なり

戊
二月

此面より

見

可為預へ通し

右 二月廿九日丹波を渡り二月廿日付れ

調上り

書面より一し一し
此作は海を渡る

戊
二月廿九日池田龍溪

拾六張三人持持

池田龍溪子組同人
長中健秀

右之者是也（此是仍書面）（也）

此度は世為町事の組同人也

作月より方組同人に刻入し知所方

同人新親に抱入並に世に接儀或人

扶持するに依りて中酒の事同公

之

戊
二月

池田龍溪子

右和泉寺殿より下すに返上

旧名子

大方寺源左衛門

堀部重吉

沖傳代より書付

右重吉は後去村中より飛騨に去

腰痛決此症以爲南去之玉列痛症
手一子足筋引諸處以難仕也
若生仕以均其世良人病之故也
二書初新云此症以海一山脈如新
痛症以集仕以爲如遺書所記者
一也此脈中流以在室中是夜分多
一也此脈以受門流中親親士書
以名本明流名脈一也一也此脈

作牙以市金以在室中是夜分多

二月四日

安子

上方之海

分札

丁為續一通

右成二月四日對馬中殿

新一也一市海分
作海分也

是

山帳

右

山

三月

三月廿日 宗 知

年番

梶田 文宅

戊午年

作才

林 松宗
高 柏 弘

書

文

二月廿日 松 誠 弘

勘定

渡邊 年 弘

戊午年

山

字

渡邊 寛二

戊午年

右第石塙の役は十月申より口中
お給色く養生仕り地質之平石お須
成事云くお給新に平石座の修し
此帳よりお給新に是又寛二役
云く申年より勘定役見當りお
お役目お給仕お給より又
同年第の役寛二役お給入仕
お給に凡ふお給此座よりお給

青い紙に書
仕度お給に
作年よりお給

二月

出立
河田安太郎
馬場助左衛門

右一通は左に記しお給より又
お給よりお給安石座の寛二役
云く申年より勘定役見當りお給

和紋同様に仕立動山子父
口部右邊の糸束は古切束で指環
式人枝持とん彩の紐は抱入で仕立
物の中上と云ふ

成
二月

松平殿宛

小書信組宛に

言束流子組

渡邊三六郎

右江葉山

沖宮山言盛六天明流子一と申渡に

お寺社を引一と云渡に

寺社を引に

同文之 中渡山言小書信組宛
一と云渡に

右三月四日丹波弓殿出候一節、日吉他出

二九火、番

高六接候

三人技持

右田孫之儀

成二十七年

内

七儀并地子

如言

武儀八儀并内儀未

武儀四儀

古是言

右孫之儀、昨

右田孫之儀

成二十七年

右孫之儀、後明和三年十二月

少書、後明和三年十二月

番、昨、成、年、過、二十、七年

如勤中、

右孫之儀、後、明和、三年、十二月、
實、新、出、候、仕、如、中、一、年、昨、後、明、和、

玉ふ実新成生貨く武術并手紙
おもお励正事公一お勤お慰く
此府山孫之傍後及元年山道整
皆勤仕商時も随ふ又主事市事公
卒悔急お励事ふ時代り一見思ふ
別白入意お勤一薪火く青き勤方
九メリもお成り留てお成後
り所い一は度二九火く青き人

一明治は時決意後見お事公
と 御才お慰く一お扶持方お事
りお勤お慰偏お事公

戌
三月

らお慰お慰
為井又六
大形お慰
飯治お慰
中井友十席

中村元右衛門

とれ

い文見書御書之段元火
書例之文書所より紅筆心
火書し時元見書御書之文
作才の例書所い文の中より
孫之書所い紅筆心火書
負実に出給仕お勤火書火

五メりもお書所い文
し書所い紅筆心火書
時元見書所い作才の例書
別紙お書所い

例書

紅筆心火書
五メりも

葉田松之席

右之天明二寅年八月見書
此 作有出技持方為人技持
子下也

紅筆大書
又次弟解
能持方為人

右之天明二卯年六月見書
此書云 作有出技持方為人
技持子下也

右之天明二辰年六月見書

成
三月 二九辰年六月

右之書有武通 月 日 敬
仕以書有武通 火 書 外見書 辰年
批版中上出許改上出改

書有 辰年辰年

海抱以休仕場市云
云云抱入二仕台云作
後事知

二月廿 武治安房

船航七多更
物何次云情

正細云同云

遠度重云

戊子年

山切米三様儀

武人校持

右重就後云同年二月正細云同云
山抱入云 作才お勤以云云
一才山守云難お勤山度以旨山服
山守重以山守就山抱云自云并尼
介木貴有仕以云云山度以山尼介
山度以山抱云云云山度以山抱云云
云云山明山抱山抱云云 作才云云
重以山仕度山守就山抱云云

戊
二月

武德安原
郭龍七郎
物同次之務

右戊二月九日對馬公殿より書付し
よりし為仕込

新に運動月日

よりし書付し

取知

戊
二月十日 運動月日

元書月組

石河寺修寺記

仁右衛門家書

運動

山田常太郎

高百家

内
三信家

七信家之様

取知
父知

右常右衛門俊父勘定お初より内
部金使より出仕切未百歳を
下至由勘定お初より内
去る十二月病死仕由月二日
其下至より先格一通お初より内
場市より通百歳格一様
此是言より下至より仕由格一
二月
柳生之懐心

久世丹後
久保田清方
曲淵甲斐守

同月

通一十歳

右和泉守殿より戌三月八日
所々書面一通より仕由

三月十一日

新田善相田中様等組人様不足
月内出入人

病氣枝氣不牙
以迄三市渡山等

同列

大田善

早部出羽等組
元波洋織

本多肥後等組

多田教馬

堀田孝幸等組

水心田集人

小菅善

合田進江等組
平渡親友等

南郡三親等組

小林十右衛門

石川善徳等組

文川伊織

右記 作才合夥中 同 永永等

中渡知中列度若年等中 内渡

一惣相 是 中渡 元

一 常日相田相掙と云ふ事、有るは、酒席と歌書
出渡

新書以

相田相掙と組人教書是、才出久

右書調、病氣

と云ふ事、上

故と云ふ

右と通、作才病氣、向ハ
收動、才以迄、中渡、山、若、以、右
大書、以、一、と、後、以

大書、以

新書、相田相掙と組、以、入、人、以

大書
是、新、書、組
仁、波、浮、織

南都五輪組
山田集人

右病氣收氣以牙新出書
作牙台以宅為一平渡水也
新書以一二族以

右為山月書也渡一

佐々子
松波平右衛門組員
右田文左衛門

佐藤代々名も右田姓也

右文左衛門渡会社中一腰痛強
出引不自由、山月以牙種、草
仕、山月世席、玉別、右田、山
中、山月、山月、山月、山月、山月

此等之くお初新無此度此候事
以方吟集く上此候中渡く右く
元今も有く川流く親類く雲在
以海く太明幸此光格く通事希抱
此 作身事下以依仕食事此以之

二月十日

松波平右衛門

斗礼

く為頼く通く

右戌二月十日對馬方殿より斗礼伺へ拜目
上へ

二月十日

米倉方組

大田番組

相承合番方殿

目組

森川助左衛門

動以内無く通此是言事へ

右 作才名於市者部公縁教

和歌中流部中列座

右 组成才以部中及

一 天明辰六月四日法皇明之也

同年四月十二日黒川市例見合

三月十一日

山少性組紀石伯智子組人教本定

丁才西入人

小菅屋組

坪内武部子記

河井秋太席

山三才令才席

金田道江子記

柳原久次席

一尾二小席

常安房子宛

酒券九席云情

小川小馬名

南新子宛

村上鴻三席

三枝初小席

島月津才宛宛云

中瀬公長

三月二日中瀬公長宛

浅井津海子宛

忘 氏田子宛

内田田子宛

源次郎宛

右云 作付台宛宛云 同 縁頼

和泉与中瀬宛中瀬宛中瀬宛中

作座

批印色 中瀬 七

一 本日云々

一番以年如常目上

此中組番以

此中組番人数以是

此中人

右中組番以

忘し酒

右中組番

此中組番人数以是

忘し酒

小中組番人数以是

右中組番人数以是

小中組番人数以是

此中組番人数以是

此中組番人数以是

此中組番人数以是

右忌明方才此中組に出入人出
 作身台支既宅多て身中渡り
 此中性組番以て身後此
 右和泉寺殿席台此海一

三月十一日

大坂市龍華寺
 坂部徳十郎宛
 大坂市
 米倉寺の寺組
 三橋友之助

並一通此令力米寺
 右忌 作身台支既宅多て身中渡り
 海新和泉寺中渡り中列座
 右和泉 中渡
 一節目之れ

戌
 三月十二日

高家行實

大友武部大捕

白坂沖太刀役一止お初

右於芝草間和歌中流書牙

酒く名及別座

右惣和 中流ハ中書總少礼附上

一うれハ書牙為和立しは和調

同

大友武部大捕

右と名を為高家行實

作牙ハ白坂沖太刀く役お初

一止お初

右戌三月十日和歌中流ハ中書總少礼附上

酒く名及別座

一安永四末三月日九子育月六角越市市中原

心城例是合肝葉以

作身以

十二日め

早漱去馬組元心

此方古服之者甚多

悼与父一而

石川又三郎

戊午十七歲

右去私組石川忠成等役病氣一升

願く通順を以明治に在る

後世公一書勤於爲之

以字法拖入五
作牙並通切

米武指儀古技持方武人技持常並

此乃矢德同心
作外多中重

於和年秋望

三月

古之失德者

早漱十有串

右へ通はる矢張なり果敢十右衛門
中史の身中一ひ石川忠兵衛の明
証に抱入る 作才並し通は切
米田枝持方より社屋を移し
以上

成
三月

田沼子辰

光

一為新し通し

右成三月十一日和泉寺殿より身札調子

三月十一日

東國

村上志麻呂

後藤井渡河

右病氣身新し通は小納戸役
市光より和泉寺に主間和泉寺

中渡部中列府若年若中列府

右巻部 中渡 七又

分札

市例札

宗門戸

村上志新

明十二日

市域に及ぶもの病氣を出仕
経成りて名代若年

二月十一日

村上志新

村上志新

若年若支配部令に役令

後古勘定書より同吟味改二筆添い

旧月付

旧小納戸

村上志麻呂

右病氣より預へ色旧小納戸改
り先考合ふ如く親類書より
以れ一筆添い且又内つゝ帳へ一筆添い

旧勘定書より

同吟味改

旧小納戸

村上志麻呂

右病氣より預へ通旧小納戸改
り先考書より親類書より
以れ一筆添い

右通三月十二日對馬より改二筆添い

和氣

沖波沙矢

村上志麻呂

私に結構な沙矢は 作才難有
仕合ふ事あるは 然る事難有
おれは留る事 波長生は 今
全收不仕は 沖波矢は 沖波矢
沖波矢は 沖波矢は 沖波矢は

沖波矢は

寛政二庚戌年三月

村上志麻呂判

戊午二歳

安友對馬

吉心大悟

井澤善助

京極海常

右預書二月十日對馬

張氏上人より上杉家へ宛てての書状の目録

小栗信重

三浦信重の文宛
世后に授

高岩信重宛

小栗信重宛

高岩信重宛

日村小栗信重

右様三浦信重宛月十二日八出書に書入
作付の月代り文宛世后に授

小栗信重宛月十一日申渡しの文宛
申上り

成

二月十二日

高岩信重宛

右様二月十二日申渡しの文宛申上り

高岩信重宛

外内信重宛

小栗信重宛
中栗信重宛

右友の席後之を中へて抄布
疵横お紙千と面表に玉眼布
色く昔生仕りけり情氣仕仕
公程お初仕服お預けし身必仕
仕りき二病難お遺せし所
所服より重し仕仕
心書後より改改

二月

心書後より改改

右へ改改書月
吟味仕りきお遺せし所
若き仕仕中
仕進より一
飯田能也
高井但馬

三月

飯田能也
高井但馬

右成三月十日對馬より

書面より此の作源を
長

三月廿四日 江戸傳書

三月廿四日 江戸傳書

中書極品唐本古筆題詞

小山内常右衛門

三式接依

寺人書持物

四二儀由是言

右四席右邊門後病死仕り年実子

惣所存古々也常々三式書代中渡
父久言取切米取枝持方多し重衣
此處下小言是は云々中 江戸傳書
写表此處下取は云々江戸傳書
年終山止

戌
二月

夫田端在云傳
江戸傳書
田中十左衛門

右戌三月十日對馬公使以下書面
此照不以此表此意不以此多一
羽書上

三月廿日

皇院書院

大治肥前

代合國洋像

右病氣牙牙續通此後沙

成合於此右牙部全緣形和象中後
部中別度若年奇中何症

一書和 上卷 中後

市用之役以台明共日定付一
也 城以病氣為出仕難
公代下若若出之

二月十九日

若年奇 連 名

人海肥前書

人海肥前書

人海肥前書

若年寄支配者合
後由勘定奉行同吟味役一
人海肥前書

人海肥前書

人海肥前書

人海肥前書

若年寄支配者合
後由勘定奉行同吟味役一
人海肥前書

人海肥前書
同吟味役

法書院書院

大瀧肥前守

右衛門尉月預一通出役清光

若年者支配者合_ハ出_ル役令_ニ渡

一二歩_ハ候_ハ

右書月_ハ所對馬_ニ殿_ニ渡_ル

一_ハ出_ル役清光_ハ八_ノ日_ハ和_ル系_ニ出_ル奥_ニ出_ル月

十九日_ハ

新書院

陳_ハ心_ニ出_ル組_ハ出_ル人_ハ内

大書

出_ル留_ル抄_ル津_ル組

小筆系教馬

右書月十二月_ハ出_ル人_ハ云

作_ル身_ハ以_テ出_ル病_ニ氣_ハ身_ハ出_ル身_ハ出_ル氣

以_テ身_ハ出_ル宅_ニ中_ニ渡_ル以_テ出_ル身_ハ出_ル身

今更今よりお務進へし初
 一は新令よりお務進へし初
 一は進めお務進へし初
 一は進めお務進へし初

右三月廿二日十二月
 右月書云歌の補成
 右一

出入人月病氣書付

大書
 堀田御津書組
 小書
 小書
 小書

右去月十二月初
 右月書云歌の補成
 右一
 右月書云歌の補成
 右一

出入人有之良一在何台中渡
右日土二月五日昔和泉寺殿より出た
一大書院より出た書院より出た
網中渡

分札

例一通信氣次

退言お急し出入人

有良一書お同山

三月廿四日

出動定以乗役

大村与吉清

上水方道方より後白渡掛り

一渡山

右於新普不常酒銭中より中渡

東松浦市より渡

右銭中より渡浦市より渡牛折下

一名及時お出なり

去る三月松村十右衛門例

同

佐勘定吟味役上水方道方を
松村十右衛門佐役替り代り

八村与右衛門

右軍源氏

右氏三月廿二日御中へ殿へ伺出伺へ
海女日記

佐勘

清水権助組方

宮崎家代書

此信代の御目へなるに御座る

右氏右衛門佐元文乙申年より

南成事述の接ぎ年平情意実
解お初中い受迎事知妻仕
そし歩行不自由にそ成り事之
一お初解之所所成順お初い身
吟候仕り受お遠も無所成い右
茂成場い成凡介多成其い受門成
い親初も無所成い受初い無所成
是を右明成先格い受事初抱也

仲身身中い初仕成事初い

二月廿日

清水権一郎

兄

一為初い受

右三月廿日對馬い殿身中同 日付初初

一由候初初い受妻仕い受

元方内閣同公
内地

井上公左衛門

高之橋
武人技師

戊子歲

右方内閣の役天羽八申年申酉地入
子辰酉戌年近之今年申酉公難
お実解にお勤りなす三月中より
陸續にお勤りなす之にお勤り
申酉の月内候より申酉の月内候

申酉の月内候の役凡介お申酉の月内
候より申酉の月内候にお勤りなす
申酉の月内候より申酉の月内候
申酉の月内候より申酉の月内候
申酉の月内候より申酉の月内候
申酉の月内候より申酉の月内候
申酉の月内候より申酉の月内候
申酉の月内候より申酉の月内候

二月

小栗又右衛門

宇田川平七

増全桂定

乳

一為彩通

例書

元方内個同公
店抱

保友文部

高斗桂
武人校

右文部院大明八市年抱
おあひき高氣
身去西九月十四日
此服より重た抱入
日大日彩通
此服より重た抱入
此抱入一仕
右方内個同公

右成三月廿二日
對馬少殿
同女八日
對乳
烟

書面一通 文作清
年最

三月曾收各郵局

西元表出最未改收

言四様儀之金持

稻村河之清

月武様文儀也

戊申歲

右河之清儀去國二月下旬一志積
在故今心收家已仕以三月改改使人

三月下旬西元表出最未改收

作身其下重以秋身秋以秋身秋以秋身
以秋身其下重以秋身秋以秋身秋以秋身

一通其 作身其下重以秋身秋以秋身

上其下

戊

三月

本多台之清

湯上河之清

破谷新左衛門

三月廿八日

右三月廿七日對馬より書付しる
なりしに留付置

三月廿八日

長崎より
水村若校より

長崎表上洞石進并金市浪線石
宜石中石大切し知事別
所為歸し後石 仰付し知事
なり格石 仰付し知事
山形用今し長き足りし知事
なり未為對談知事所
一々知事
右於海し同知事列座和泉

市前長

松心慧女坊

長壽表也。洞必進并。今不浪傳。不
宜。身爲。爲。爲。爲。爲。爲。爲。爲。
活切。作。作。作。作。作。作。作。作。
組。組。組。組。組。組。組。組。

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

右於古右才新全緣教和象中

右惣別、二通、二總上、七、十、後、

一若校与古物定而亦其若以振其作酒以反

活動之車

長崎屋次

平田寛十郎

近年世間水乏、舟長崎表交易
多、又、お成り、此、以、當時、間、海、
方、長、果、し、舟、中、も、一、多、し、故、是、
今、而、限、係、し、故、今、秋、以、來、少、し、其、
以、此、お、少、し、切、其、形、又、格、別、に、お、網、
以上、今、而、限、し、故、お、成、り、舟、中、

出、要、し、故、舟、中、暫、し、舟、中、能、法、
切、其、舟、中、以、係、し、又、既、勘、定、格、
其、舟、中、百、係、し、其、以、此、其、其、
法、我、中、以、故、今、三、格、其、其、

右、通、し、舟、中、海、に

二月

長崎屋次

近年也相承延年長壽表交易
君文にお成りては、い苗村河濱
方々略し、たす、一方、後且又
去不浪張、後之秋、年々、
耳、い、は、お、た、は、た、た、
九、同、世、之、不、浪、後、之、秋、年、々、
為、要、之、後、之、不、浪、後、之、秋、年、々、
は、作、月、松、心、惣、太、未、門、平、田、由、子、席

後も活載は 作月以事 以旨
一、五、切、之、意、い

正勅定年次

同文

為要、後、之、不、浪、後、之、秋、年、々、
は、九、同、世、之、不、浪、後、之、秋、年、々、
後も活載は 作月以事

以名其地之云想其地之云

中海山

右之全紙中少敬出海一

書面同く之仕名

文海海草水素い

二月廿日 之世丹境

由常陸段平田惠十郎段支配勘定

按云 仰付以名出書付之云

飛鳥寺母之志中なる云云

一之中海海之海段なる長海表

所用白差掛り出段之北なる船色

中海沖用白一海なる云云

一仕名其地之云

三月

長崎奉行

金百両

佐助定次格

相心惣右衛門

佐助定次格

平田寛十郎

同之様

高木菊次郎 内奉貢 浪人内

お渡り 辰巳月十三日 書付 浪人内 勝手

帳簿

右長崎奉行 誠治切申年

長崎奉行 誠治切申年 浪人内
より 二 五 五 五 五

佐助定次格

同文

お渡り 辰巳月 浪人内 勝手
五 五 五 五 五

右三月廿九日 誠申 五 五 五 五 五

田舎子

清井小右衛門

久保田新助

田舎式筋書云云

右久保田新助書云云
持病
瘡積
書後押
書初
書中
色
書生
仕
知
浮
性
活
水
成
性
氣
仕
田
家
之
一
お
初
筋

田舎式筋書云云
持病
瘡積
書後押
書初
書中
色
書生
仕
知
浮
性
活
水
成
性
氣
仕
田
家
之
一
お
初
筋

二月廿一日

清井小右衛門

付札

一為彩一通

此持目人

松平信之丞

中村玄仙

南田千藏

右之江島の波室一替之圖年々一由成
年近三拾八年由年々之由深実解
お初より年々妻仕りより由解年

彩之江島の波室一替之圖年々一由成
年近三拾八年由年々之由深実解
お初より年々妻仕りより由解年

三月廿一日

松平信之丞

見

一為彩一通

右二通成三月廿一日對馬島と浪より羽生廿二日見

烟云

四月二日

此裏切書以

富永年人紙

中書探書家書以

小姓寺僧寺

勤山内並一通此是言多

同

井岡孫右衛門

名方内閣書以

和田之紙

此書

勤山内并今並一通此是言多

右五 作身台於此書本部

縁故為度、作身台申渡部

列度

但和国主紙中渡、言ハ書年

竹庵

一 巻 中 海

一 天明八年九月二日川村文左衛門見合

言部百石

小菅清旦

信田安藝守宛

沈清親友公席

天明八年十月

右友次席後支記世活九叔母世年三弟

代明十六日申渡比海一書中一云
以上

二月七日

信田安藝守

右和泉寺殿より為仕由了

三月廿九日

此書定必後
是八想所

少人作同字第組

依之間平書

右為書之書書習

作付新以月重一進出是之平

名於菊一同縁教和象了中渡

光中列府若年書中仍所

右為和 是 中渡

為書以

少人作同字第組

依之間平書

右為書之書書習

作付新以月重一進出是之平

右對馬之殿一書海一

一為日語書一為書以出入人等一為月重

海軍少佐 子爵 永田 武吉雄
同日附送之函

小主人 謹啓

行田幸年組
依之同平書

右明廿九日早附
冲城 永田 武吉雄 下 幸年組

三月廿八日

右和泉少殿 函達

依番留同

此勘定以係収
是八書
少人行田幸年組
依之同平書

右是八紙 函達 勘定組 以 函達

吟集後云 作舟以舟年冬後
有者之門下 有者留一云
作舟云

年永六月

六月

西風定吟後
十左邊乃熱風
雲中入云乃此也
久保田朝一也

右十左邊乃後出代宿一云
吟集後云 作舟以舟年冬後
有者之門下 有者留一云
作舟云

右三月廿六日和氣と微く奥より日廿七日
海下

四月二日

長部出羽守組
大正書組
玉雲寺金剛院

大正書組田柳澤守組
後部出羽守組
以同井後左衛門

勤以月華一進退守守守

右兵衛 作才守守守守守守守

縁款守守守守守守守守守

右兵衛 守守 中渡

一日日

大正書組

長部出羽守

四月二日

沖城守守守守守守守

四月二日

右兵衛守守守守守

四月二日

相国寺御書

新田善徳氏

目録

津津八十九席

乙并平九年迄

勅令内奉通出是言なり

右に 休身台於右右平部全

源頼朝臣等中後部中列在若

年寄中列在

一巻

上巻

中巻

出典

書及文書集同公

出典源氏書

出典代々々々々々々々

右源氏書乃後撰氣多物語活

之上空焚活活事之下相勅將

之書此内順相勅令方外一通

此帳中渡り花介多此所より
以休仕の事門清の親類も
此所より明証は格一色も
其 作月より此所より

四月廿

安成又書

光

一為頼一通

右此四月廿日之部御帳取より此所より

奥の組

奥の組

右左門

右此里浮賀名門清より
勤山内無一通此所より
其後より一の中渡り花介
此所より此所より

倉地改入物
和参田次希書據_に

同文云

中渡山を新し内無し通山_に
中下り山_に記す意奥坊之組_に
下り終_に

右月六日對馬之殿中渡山

中渡山書付

奥坊之組_に
右左邊_に

右心屋_に有る一人し明_にキ_に

中_に付_に

右_に有る日_に自_に人_にし_に要_に也

右_に有る事_に也

勘定役

大壯友之席

右此被皮明キ給ハ一ニ中渡山
勤山内無ニ世法長ニ云下山
手辰也一ニ中渡山

右四月廿日和永寺殿山渡一

中渡山書付

正徳年方勘定役

大壯友之席

右此被皮一ノ一明キ給ハ一付山

右永月和永寺殿一ノ更上出

小書清田南村之親記

世系古板

小林十右衛門

三三百張

高三石庵

伊丹松之助

右十右衛門殿去三月十一日新水着
出入人等 伊丹山守右代松之助
以六日中渡り海へ寄る上云云

申

四月七日

南部之親

右四月七日伊丹山守殿より面仕上り

四月七日

栗山重吉殿

松平六右衛門

氏代松之助

右病氣身新く世に改清丸
氏代松之助右守部金澤松之助
中渡り中列座若年若中
乃座

右惣加 せ 中後

御用へ後より分明と旨付
御も九に二と云ふおの出仕難成
ゆり各代二と云ふおの望

四月六日

若年寄
連名

松平六左衛門及

右取笔一と云ふ一

松平六左衛門

松平六左衛門

若年寄より紙寄合と云ふ後令と後
正勤定より同紙寄合と云ふ後令

正目付

西元中葉の書

松平六郎

右病氣牙痛一通此後清光
帝合之親親書房より
下之書

正勘定年

同吟味

同文

正勘定年

右一通云新神威

松平六郎
作付新書仕合

本年山崎江口末上月

作付お初申より

新中一紙お初申より

此座より分奥に醫所候事多き
 旨合に醫所台田元早茶お用
 色く若生仕り切り危角同篇
 抄中中交台何も中交中
 急に此物一仕所之座に海に取
 事先より此より候事願ひし

寛政二庚戌年二月廿

西丸裏の番人

松平大左衛門

成二九爾

安友對馬守殿
 吉之入大悟氣殿
 井伊之助少輔殿
 東松仙前守殿

右の月吉日に於て補殿より候事多き
 奥に同日二日海下

西丸裏の番人

大常孫玄清領事力
大常孫

松浦忠方序

右彩一通西丸由裏の番方力明終
一文中活山動山内指人持持
山留山居山一文中活山

右中月七日對馬中殿古酒一

中活山書方

西丸由裏の番
大常孫玄清領事力
大常孫

松浦忠方序

右中月七日對馬中殿古酒一
一文中活山動山内指人持持
山留山居山一文中活山
山留山居山一文中活山
山留山居山一文中活山

お礼の事又先の教事お精お物
忠の席使も此年までお物お物
今、此所よりお物通西丸の書
子力中後此技持方格人持持此中後
中後

右月日自對馬の故より此他出

書向新く此中後
此作後年此中

四月吉日 安慶親弟

此年方夜

長村人七

此七後

此後家文持

此中常陸
此武蔵

外

此收持方三人持持

此

長村人七

此七後

右大七段近來陸續出於今之牙
包裏仕一和物所云此所仕以石也
市欠云如不將奈内之書代也
作身云下以和物中一以身以仕仕
以受右在內段是此見當和物
手舞也達云仕人極之能本當和
出仕仕以和書代一以和物仕仕
世實也右和一通一中一海以右由能

左中云

人七祖父是村久也

嚴有院極冲代延室七末年於極田

也嚴也被友云 下書和物當水

二酉年演也嚴也所發也又

是村云右也

文昭院極冲代正德二辰年久右也

治政也 作身和物如享保也

亥年濱田殿上人城がし月
此月才之祝文及之与在同年

十二月此作事方書及之

作才六七段

有徳院柳沖代元文二己年十二月

久右衛門祐及之 作才抄勤

在立以之

博依院柳沖代宝暦元未年十二月

此作事方書及之 作才

右一通出入人第之文此作事方書及之
亥年此作事方書及之
出給抄物送之此用此中上段
之、此作事方書及之
此作事方書及之
之

戊辰
四月

安斎親筆

新書以

藤山名物組は入人月

人書

三花出雲子組

余清久之書

右云為十二月入人月

作月山名物組は入人月

次月山名物組は入人月

以入人月山名物組は入人月

新書は出雲子組は入人月

お島は入人月山名物組は入人月

中渡山名物組は入人月

右月十一日十二月山名物組は入人月

出入人月氣之書

大書

立花出書子但

余依之公情

右云右三月新書は出入人月
海一月中海に在る病氣を
以今心より書出せし出初に
此座に在る書とす中々

右例に色収親の身退るお
出入人有るに在る中
右月三月に在る書とす中
右例に色収親の身退るお

一入書以て
月礼因書

才九

例に色収親の身

此等お忍び出入人
有之旨一書付也

小菅清組支配

勝安蔵子組

小松孝次郎

右此等お忍び出入人
此目付一書付也

此目付

同文

中菅清組支配
一書付也

右此等お忍び出入人

中菅清組

小菅清組勝安蔵子組

小松孝次郎

右西基町著一人之明記 中付
右四月六日海部右卿より西基町

小菅清組文記

松平清海右組

依友定次郎

右
沖臺柳古廣安少老之明 中付

一 中 渡以丸庄南与振一 中 渡以

庄南与振

同文之

中 渡以丸小菅清組文記
一 中 渡以

右四月十日丹波右殿古渡一

中 渡以書付

少當法祖松年治法多支既
依及定之序

右

冲是極中廣愛小老物一人一明

法中身山

右月十日丹波寺殿一山出

書句一之文作漢字

四月十日

夫田松年書
如多古之傍

田松年書

常右馬門家子也

星狀物一物

右將表出卷而人見名出卷而人

中夜分年彩以年彩一通

作身年巾更以年彩以之

戊申
四月

久田堀表之儀
迄未得本意
田中十左衛門

右の如く合へ上水へ

例書

寛政元年丙午十月廿八日

佐藤市左衛門

又左衛門

二田又七郎

右の如く

又十郎

三浦源太

右の如く表出是市人見し爲は事公
作付し名人帳宛殿御作渡し

小菅藩組支配

坪内武部組

人小令十郎

本小石川若生市附同人明徳寺
中渡山花町奉行一平後山

町奉行

田文公

中渡山花小菅藩組支配
一平後山

右月十二日丹波寺殿出渡

中渡山書付

小菅藩組坪内武部組

人小令十郎

右小石川 菅生不附同人一人ノ明
治中付也

右戊辰月之日丹波方殿ノ山鹿出也

佐藤不佐基不氏

中巻柳中巻不巻

三田新太郎

右

中巻柳中巻不小巻を組以明治
一文中 渡山勤山月並ノ通也
文中山月並ノ文中渡山

右戊辰月之日丹波方殿ノ山鹿出也

中 渡山書付

中巻柳中巻不巻

三田新太郎

右

冲易探古脉而小罗毛组以一人

明徳中分以

右易日古同人より興

一就書一修云古例元古徳合一云徳

表坊

玄子

周

意

玄子

玄

良

宗古子

宗

久

良子

良

純

玄子

玄

壽

玄子

宗

情

清甫子
為甫

松次子
昌壽

右表坊主見習一房也

右戌四月十一日各款の補綴より翌十二日以後
を例として此處に及ばぬ例元より此を合

及

書面一色に作添筆を

四月十日 松田小吉書

年 桑田忠孝書

年 飯田新右衛門

此風品を考へて
津川彦四郎

此同不二人
大右衛門△

右様大儀を人々持持

右様大儀を人々持持

右目り

勇助

右ノ名月ノ一病氣ニ在リテ切
 止場不難お勅ハ身在止場不勅
 止知人お勅ハ身在止場不勅
 お遠ニ在止場ハ傷ハ身在止場不
 表止場不ハ身在止場不
 曾助止場不ハ身在止場不
 仕度止場不ハ身在止場不
 文作止場不ハ身在止場不

月

文田
 月
 月

△トナレ

例書

安永二年二月晦日

此風各處皆有
言其動也

右記表身彩之表也
小乃也
此作海也

宣政元年二月十日

此風各處皆有
源記

右記表身彩之表也
此作海也
右記表身彩之表也
此作海也

書局一通
四月十九日
此風各處皆有

三指に依

そくす枝指

三指をたす。

成平蔵

右是は諸の法病死仕り牙家重恩
長をたすなり。法武書代中。海又
以来は。切来。枝指。方。より。重
表。は。最。下。古。表。より。重。なり。
より。表。は。最。下。古。表。より。重。なり。

左新の望

申

四月

○トケレ

例書

左国録。左。重。恩。
法。武。書。代。中。
田。中。十。九。年。

寛政元酉年七月十日

本村八三席

卷八之帛病紀仕將車之帛

表亦卷不取少者去之

你身以舌對鳥之腹

右戊辰月廿日夕々所々
為仕去部々備服

同色刻入市名錄

序

四月廿四日 金田直孝

和平經濟學

松平信法与祖世征伐公竟仁在武河
去月廿九日病死仕公才海河一役
令自迎江与祖世征伐之人因在武河
割入下下武河寺公定

戊辰
四月廿一日

令田近江守
松平信清守

佐藤市左衛門

佐藤市左衛門

松平六三郎

三川半七郎

右

市左衛門佐藤市左衛門

中
渡り

右月廿一日去部中浦坂市左衛門

中
渡り書付

法橋市書卷

松卜二之席

宮川中七席

古川越七席

右

御臺海内縣市少官卷之くくく月

給くく付く

右前月四日十九日同くくくく使か

法例元正御合くくく

四月廿四日

長部出羽守組

大内書組

大内保五之書卷

同組

大内保五之書

勤山内書一通出書書

右記 御才台於出書書御合

縁歟 浮夏子 中 海部中 浮夏子 所
列序

但 浮夏子 大 海部中 浮夏子 所

右 也

一 中 海部中 大 海部中 浮夏子 所

一 弟 日 之 所

一 組 成 年 所 以 也 及

中 上 年 所 以 也

中 上 年 所 以 也

中 上 年 所 以 也

中 上 年 所 以 也

中 上 年 所 以 也

中 上 年 所 以 也

右 安 部 中 浮夏子 大 海部中 浮夏子 所

中 上 年 所 以 也

中 上 年 所 以 也

中 上 年 所 以 也

此後お新さんへ御一新の通状
お下重の儀を新さんへ

四月

明樂家文

廿九

令子之儀

一為新さんへ

佐地米孫儀
或人様様

明樂家文
河新定七郎
四十七歳

右新親身此年にお新兼此後お新
より此後お新さんへ御一新の通状
お新抱一十月年にお新さんへ

四月

明樂家文

令子之儀

廿九

一為新さんへ

右書月二通西月廿一日付九個之部書取
五通一何も五例元法至合三及

五通代一何も六書取

岩田和左衛門

五通

大井信清子親男

右和左衛門法至合三及 體痛候
書付難お成色一書生仕上候
今もお務中一書生仕上候

安政元年の法一書生仕上候
新味仕上候お達安政元年
親一通法中一書生仕上候
後厄今も一書生仕上候
一書親お一書生仕上候
先格一書生仕上候
作付安政元年の法一書生仕上候

四月廿二日

大井信清

分札

一為親へ通ふ

右戌四月廿二日公親御座より分札調
翌日廿四日上

四月廿一日

奥野原
河井松庵

二九定物へお初い

沖田九もねへお初い泊へました

お初い

右於土左間井浮々部御座より
別座へ

右惣知上

一相之給ふ所及

田舎子孫

奥醫師

河村松庵

右二丸定物へお勸め

御中丸はもろくお名泊ともう

お名泊ともう 作分は名手殿お名

一と名

右二丸定物へお勸め

同

奥醫師

河村松庵

右二丸定物お勸め

作分はも

御中丸はもろくお名泊ともう

作分はも

右二丸定物お勸め

海下

四月廿七日

大田青堀田柳澤与島部出羽与
組人数不足身出入人

小菅清組

坪内式部家

下河原太助

西心次席助

折井右席次

合田出羽与文記

大久保多又兵衛

竹内新太席

小角貞之丞

第百五十五卷
加茂改太郎

江東清物

肥田留太郎

南部五郎左衛門
津田六郎八郎

紫清徳太郎

膳田安藤三左衛門
阿部新右衛門

丸毛彦三郎

山角岩八郎

中平信清三左衛門
中平次郎七郎

大谷吉十郎

高島信實三郎
高島完三郎

三才集賢堂
戸田八郎

三才集賢堂

河野御前書
石井清三郎

伊吹守

山下長右衛門

石河寺
荒川三郎

佛林寺
中沢孝之助

月夜虎

石河 作
伊豆守中渡部中澤正太郎

一才 中渡

一、大田書院、其、後、新、日、洋、行、等、が、
書、付、渡、出、る、と、同、人、に

大田書院

大田書院、其、後、新、日、洋、行、等、が、
書、付、渡、出、る、と、同、人、に

大田書院、其、後、新、日、洋、行、等、が、
書、付、渡、出、る、と、同、人、に

大田書院、其、後、新、日、洋、行、等、が、
書、付、渡、出、る、と、同、人、に

小田書院

小田書院、其、後、新、日、洋、行、等、が、
書、付、渡、出、る、と、同、人、に

小田書院、其、後、新、日、洋、行、等、が、
書、付、渡、出、る、と、同、人、に

右新氣收氣分牙人古著は出入人
 又 作牙台支既完分一市中後
 右大古著以一二支後
 右あふ月書作三古殿古後一

小書法組支既

勝田安藤子組
 元出既組以古初氣

牙書法入
 作牙
 中書あ此群
 右新氣分
 十八

右新氣分牙人古著は出入人
 又 作牙台支既完分一市中後
 右大古著以一二支後
 右あふ月書作三古殿古後一

此後

同文云

中後は尤も書後組と記

一々後

右月^{四月}五^日書^後組^之歌^の補^綴此後

一云明^八月^十日^申定^方心^は同年^十二月^秋系
又次^帝苗^二月^八日^見つ^る帝^側見^合

小書後組勝田安盛と組
享保十六年八月廿二日
此後^此川^之と^て組^と此^後
又^此月^は切^束七^後後
又^人持^持と^りと^り後
又^三書^後組^と此^後
又^此月^は此^後と^り合^合
又^年年^は此^後と^り此^後
又^二月^八日^元也^年月^十
又^九日^此と^り此^後

言七種像

六人扶持

戸部卿少輔
成藏十二

時

大泉少輔
成藏十八

古事記在事所後以別氏中上
通し病死仕り給え此抱入し
此座より目彩不ししに

年久愛お初り名に後主上元
此座より一お抱入し此座より
御憐愍とて此座より抱入し
此座より抱入し
此座より抱入し

成

四月廿九日

膳田安親

月分礼

此後組以本朝國許小書法
 在立以名病死ありては
 此後三人に抱入一戸を先なる
 伺本海以名書面一戸系
 此本席後此後三人に抱入
 以在一戸海式
 右四月五月書候豆も殿より奥本海向て色
 海下り

表内書不取

表内書不取

永井平兵衛

右西丸表内書不取候一戸中渡り

右六月二日冬部書不取候一

但表内書不取候一

中渡り書不取

表書不設改

永井平之席

右平之席設西凡表書不設改

明詔中書

右同日内人一一與

但改設身右一書便也

一夫明之卯年二月之例表書不設改
改設中書一書ハ書便也

表書不設改

惟唯若横書是市人亦不設改

人亦不設改

市凡書是市人亦不設改

一人数言一内亦不設改

市凡書是市人亦不設改

市凡書是市人亦不設改

市凡書是市人亦不設改

一 此所一人之収るべきものなり
未だ一冊に治政の事代筆
しかば一冊に治政の事代筆
通ねる所なり

泰西の事なり
権限若しは是なり
所入樂し

人なり
然るに
己より
作なり
有るなり
此なり
言なり
高なり

一同此卷兩人ニテ
 作才以海を
 難お成海に此所は乃以來此海
 人にお成りふ此卷兩人三人
 之據當時に人数より内を人も
 お減りて之論にお成りて
 作才以乃其内此海一人の内
 一より論にお成り此海一人
 此海一人を成りて此海一人

美事紀亦一一代留、いゝるも、
人、あゝ、あゝ、あゝ、あゝ、あゝ、
あゝ、あゝ、あゝ、あゝ、あゝ、

右帝書之字及書對馬古歌古史之古教之字
以此古字一古之通古史出ル

近
松平左衛門
林是右

右是右邊門後面後方上旬湯安和
於以後聲送上流名之若生信以
今以後方不仕也事公可也初將
云府府信和就以身和之也此順
中流厄今多之此府以名此味仕以如
川流以親和之云府府以之身右明流
名流之也事初也

作身來在法度中整頓

五月七日

松平氏金表

分札

一、新編

右六月初七日海軍少卿奏同日身死淵臣批云

建群和志同

海田忠之清

面七十歲

右の如き情状後室曆六子年一ノ酉戌
 年進三指本年迄年之滞実新
 お初り之を免義仕り付申服事
 忠義成化介門清忠育て仕新
 も云成度少男申服中一泊右明徳先格
 一進千前抱云
 作才云下し格事新
 六月七日
 建部人知事

月九

一為彩通

右の月七日御衣事殿事不同 日付新
 此上之要由免義云々

六月十日

筒井後集の記

大書小支肥後守組
 松永守所之侍
 二百九十一
 六十二

浅草山麓を以て山麓云

御舟山麓種、此百歳云々云々

寅六月迄てお勤い

右於山右手、此金澤新丹波云

中渡和半、深心云所別度

右惣和

去而二月十五日

羽太主膳 例
西尾伊兵衛

中渡山書月

右傳筆云云

田村金太郎

右伝筆、方勘定役一人、明瑞

中渡山

右六月、白雲、神、神、殿、上、伊、兵、衛、殿、云々

右月人、奥、出

勘定役書上

書面田村定次郎海部
定次郎海部今迄五
本以由是之由是扶持
子孫以由是之由是扶持
子孫以由是之由是扶持

成育九月 松平藏部
安慶越前守

高三様儀武人扶持

内 振太様 旧是言

半枝持 旧是扶持

旧是事下是所記

田村定次郎

寛延元辰年十二月由是扶持
同公由是扶入子成室二時六亥年由
八年由是同年二月由是扶持
子代由 作月並之通由是言

此是校勘より近頃戊午年迄近頃迄
都合記録之年お初より

一祖父 旧姓本同公事務より 田村安房郎死

一父 右同氏 田村重右衛門死

三孫孫即人校勘

内

日記

石陽友右衛門

戊午二歳

孫三孫 内記

即人校勘此是校勘

明和七寅年三月父石陽友右衛門

流式より近頃迄

作付又付此是言此是校勘より

近頃戊午年迄近頃迄武接より年

お初中より

一祖父 家重清同氏
お初中より

石陽勘右衛門死

沖用之の者、此所より此年
下より、先期より通、河平、此年
此は、枝、持、た、る、所、より、此、年、此、年
勅、定、後、此、年、此、年、此、年、此、年
此、年、此、年、此、年、此、年、此、年、此、年

四月

松平藏

安友誠

本件、此、年、此、年、此、年、此、年、此、年、此、年

六月十日

進物、此、年、此、年、此、年、此、年、此、年、此、年

小菅、此、年、此、年、此、年、此、年、此、年、此、年

大竹、此、年、此、年、此、年、此、年、此、年、此、年

小菅、此、年、此、年、此、年、此、年、此、年、此、年

只、此、年、此、年、此、年、此、年、此、年、此、年

何、も、勅、り、此、年、此、年、此、年、此、年、此、年、此、年

此、年、此、年、此、年、此、年、此、年、此、年、此、年

一、曾子

占入子辰書

三
孫
儀
武
人
校
勘

小重山方信如書
大竹傅古希門
二十文

之振衣

武人技藝

不進為其次上番二人之明証也

六中分

右有六日丹波子殿 } 奥 是 右 同 九 日 海 下 凡

元方古調

元方西園自公

中村雪助

本小書後方仔細看明中法口可也
中法口元小書後方仔細看明

小書後方仔細看明

同文云

中法口元方西園自公
一云後山

右育 日對馬方解一西園

中法口書

元方西園自公

中村雪助

本小書後方仔細看明一人一明

中法口

右六月十日海島方解一西園

但對馬之教區所屬之寺也

九月十二日奉准
一、小幡法方定小幡内之者人禁田文内所家
一、月内假中演以所應本為仕海系之殿

通上

奥坊之組

寺主同坊主

長

右

表

左

右病乳牙牙類之通市教寺之坊主
由者一、中演以所應本為仕海系之殿
坊主

奥坊主

主

長

寺主同坊主

長

左

大立間坊々

久 朴

右病氣より身類へ通表坊々
由番一丁流いも由同明証で流い

奥六人

安六席

右病氣より身類へ通由教考金
由番地しな一丁流いも由教考金

一 流い

由教考金

大立間坊々

長 下

去 東

右病氣より身類へ通由教考金坊々
由番一丁流いも奥坊々組以て流い

奥の人

安六郎

右病氣より彩へ通し教書公に
地へ去中流に奥坊を組以了
候に

右同朋に

奥坊を
立 長

右時中流坊を

清 並

右主間坊を

久 朴

右病氣より彩へ通し表坊を由書
中流に奥坊を組以て候に

右小月十二日由書公に候に

近冬子

北野流在馬場組見

中源良亮

河橋代為一名、云云

右良亮後商主より眼病おれ
迄く養生仕り切れたる別向事務
此等にてお勤務に成度此帳おれ
片吟余仕り云々お達く後七云云
此等にて通帳中流し後一右明

光格へ通子常抱

作片云々並に御多謝云々

八月十八日

小井次郎右馬

光

一、為預へ通

右代官八月十八日御多謝云々

書面同く色紙作

春水知

四月十九日

柳生を懐念
久世丹後守
久保田清海守
森玄玄清
言尾寛十年
作久間忠八
清和守

今春の春水知
遠江國新見村上知
一言武様八石

小田倉左衛門
氏代安和

右大幕大席左席内仕重正

作分山左衛門遠列新見村田安上知

くふ小田倉左衛門氏代安所定安守

氏代安守書面一通氏代安所

刻入山左衛門氏代安所定安守

上

成

三月

何分礼

書面何之通一十通

右戌六月十八日越中へ殿へ何出十九日礼
但三月廿七日海部へ殿へ何出十九日礼
旧同朋江へ上へ何出六月十六日何出
而へ中へ何出何出何出何出何出何出
越中へ殿へ何出何出何出何出何出何出

内書院者氏へ

内書院者明組方

三浦長房

小川俊成

高永権之信

天狀勅在

藤本公成

後浪新十郎
 若月保右衛門
 江崎七郎右衛門
 右と我は有る方と人全用
 何物と方と人秋元を致さる
 三人浪客浪客と方と武人若月
 内膳正方と人つゝ刻入

同日
 永井平之助
 小池市之助
 小山乃十郎
 中村健右衛門
 前田清之助

藤田村金

堀本村金

中條長金

右に令田河原等五人一人松平
下村等五人一人温平隠岐等五人
二人駒馬根大内元目人二人友室

肥後等五人一人長谷川丹後等五人
一人一、二刻入

右に通て五人坊主先主等五人
以て通て五人坊主先主等五人
以て通て五人坊主先主等五人
以て通て五人坊主先主等五人
以て通て五人坊主先主等五人
以て通て五人坊主先主等五人
以て通て五人坊主先主等五人
以て通て五人坊主先主等五人
以て通て五人坊主先主等五人
以て通て五人坊主先主等五人

但右刻入の組は明キ有るもの
中人にて其故は外組にも
明キ有るものにて組中人刻
入の組にて其故は外組にも

集書院昔明キ組員

関口及左衛門

源兵衛及左衛門

中村及左衛門

谷村及左衛門
小村又十郎
右に當我候有るもの一人は明キ
組中坊内江も一人は明キ源
源兵衛及左衛門一人は明キ源
兵衛及左衛門一人は明キ源
兵衛及左衛門一人は明キ源

百人組し

秋ふす右衛門組方
そ人し明幸流

田中

倉橋三郎門組方
そ人し明幸流

目

松波平右衛門組方
そ人し明幸流

車書院若山組方

三浦源三郎

竹垣右次郎

松花元九郎

目

長谷川平右衛門組方
そ人し明幸流

大正

堀田柳澤吉同人
そ人し明幸流

目

花房周備吉同人
そ人し明幸流

目目

味部元九郎

松中定右衛門

村上元四郎

田中平次

目
酒井隆政と月人
三人と明法

目
白須甲斐と月人
二人と明法

目
水谷隆政と月人
二人と明法

目
新谷隆政と月人
一人と明法

目
酒井隆政と月人
一人と明法

人屋右衛門

児清長右衛門

村心幸右衛門

清来守右衛門

様田源右衛門

塚本傳亮

星本入之席

矢吹庄之席

篠原武左衛門

同

金橋三郎の組員
一人の明証

西村玄亮

同

安部平吉の組員
一人の明証

片島友助

同

酒依清吉の組員
一人の明証

村山安太郎

同

押田信吉の組員
武人の明証

浅井敬十郎

同

武友玄吉の組員
武人の明証

田村元次郎

同

長谷川平亮の組員
武人の明証

松本十郎

同

奥村忠吉の組員
武人の明証

三木丹治

同

松本達吉の組員
武人の明証

葉山俊之助

同
荻東老境多祖恩
走人之明路

授勅勅口席

同
松平冬寂
夫人

相心甚危

郭井之席衣

因 本府各處均同
去人、怕強

角田玄左衛門

右通一帝海龍向一疾以

因
後抱入之
永世平寧

前田 祐

右書院方何見之組は成は老は之は人は

一、五、八、切、

大、出、者、以、

一、人、一、明、寺、終、

一、人、一、明、寺、終、

西、九、中、書、院、書、明、寺、終、
松、小、定、右、馬、
壯、口、長、心、席、

田、中、本、花、

一、人、一、明、寺、終、

大、金、右、馬、
見、清、長、右、馬、

一、人、一、明、寺、終、

村、小、幸、右、馬、
清、本、定、右、馬、

右、之、通、中、海、以、男、切、手、意、出、書、院、
書、以、一、人、一、明、寺、終、

伍德年行

人別調

同文云

伍德年行

人別調

同文云

百人組

人別調

同文云

伍德年行

人別調

同文云

中渡り書付

法書院書目年組与力

八人

同日人

八人

右に法書院書目年組与力
組に三人、中渡りも佐抱入、
名氏父と昔代お、お成り、佐抱

入、法書院書目年組与力
組に一人、中渡り

同与力

八人

右に法書院書目年組与力
組に一人、中渡りも佐抱入、
名氏父と昔代お、お成り、佐抱

同与力
八人

同日人

三十人

右主百人組与力西先手組与力
大西若同人西書院番同人西旗
手組同人西陸軍組同人
西先手組同人明丰強中渡

同日人

及抱入一名

二人

右書院方同人西人三割入父
番代お成り了後抱入に強
城切に積り中渡

奥坊主組

奥人

依り席

右奥六人組以明強一中渡

初月廿五日通函足高市是持持
其下以旨之辰也一市一海山

右六月廿二日海山与取市海一

一奥坊之組以之書不之市創元日市然合
一市海

与持儀之市持持

市書法方市持持

市氏市市市

右市市市法云一市中一市持持
市持持一市生仕市持持市市
市持持市市市市市市市市市
市持持市市市市市市市市市
市持持市市市市市市市市市
市持持市市市市市市市市市

市

市

市書法方

右市市市法方市市市市市

於又吟味仕り家お遠き所種々
此帳看起し帳中流し流し抱入し
別紙と申す上之

四月廿二日

飯田徳光
三井大隅

小菅屋方市掃落
子市掃
三井大隅

右帳方市掃落安永九子年二月廿二日
小菅屋方市掃落一之明年流し抱入
仕り家之後眼病お流し流し
お流し抱入お流し流し
預し通し帳看起し
お流し抱入お流し流し
お流し抱入お流し流し
お流し抱入お流し流し
お流し抱入お流し流し

多に内庭の芳名育るに為勝の糸
法内抱入おれし身吟味仕り
人なるに眼物収氣仕再中
りるも形にち漢津をとお物に
中極子に内庭の糸市席内抱に
名にち内庭の糸実子に法に
内庭の糸世育父の用キ法に
勝の糸内抱入て中法を好む再物

中才の法に内庭の糸一通り入
内庭の糸に

戌
二月

飯田能重
高井大陽

種原君後法用人

後法君
法雲
布施法席

右店裏昇組江明治一、二市渡山
右勤山内並一通店足高、下、山
以、後、也、一、市、中、渡、山

中渡山書付

種那若根
山裏昇
布施、法、十、席

右

種那若根、山裏昇組江明治一、二市
分、山

種那若根、山裏
右、店、足、高、下、山
以、後、也、一、市、中、渡、山

石坂、寺、十、席

右、種、一、通、山、内、見、馬、一、市、中、渡、山

言武振儀

武人技指

佐濱方由地

久保孫市

成七十七歳

小書屋組

石河寺屋組世後

孫市家子惣次

久保孫市

成四十二歳

言武振儀

武人技指

日

言武振儀

武人技指

右古次弟後明和三年九月由濱方

明治由地、子武安永十七年二月

小書屋組世後

作方由成永進由寺屋組合二十二年

お初中い

孫市家子

久保孫市

成三十二歳

右孫也席後古猶方之長人智也其
大月六年奉十月一為成年進
六年お初中

右外男子之度

右孫市後去秋中一病後お初生
お初生女百病死仕お初書面
一也時去秋中一書後組世後
お初生女孫市後古猶方之抱

右孫市後古猶方之入一明キ子也
右明キ後一初男孫也席古抱皆仕
海一初生

戌
六月廿二日

森山忠三席
公清家右席
松田小左衛
同云平右席

右戌六月廿二日海系古殿古下為仕同廿四日

返上

六月廿二日

林大學以

奧詔云 作舟

右於上立間丹波中河原中澤等所
列所着年寄中約所

一、身始 如島 月次講釈一三ノ除事一三ノ明

六十年九月十九日人大學以

林大學以

所當而席者重之、如人切下
世所禁此者、由是固清也
右、乃活用云 作舟、以名、是也
漢、乃、是、一、乃、也、

儒名

葉壯虎助
長田清助

聖堂面席所用

作舟以林大景以是相淡長島と

又之と水斗は

右於同席ある、京極海軍中後
書月海

右三人は書取

聖堂面席所用は内密院個
一は八は九次相遠江一と後
表立は八若年奇月昔に下
中書事

葉壯虎助
長田清助

葉狀彦助

尾田清助

重宝取端中用中
不取端中用中

此物定有

右名和同

重宝取端中用中

作付以付右取用中不取端中

不取持取以付右取用中不取端中

葉狀彦助

尾田清助

重宝取端中用中

作付以付右取用中不取端中

部全帳席卜ナクハ通リ七五
決ハ

一右三人箱ハ例ニ色切紙大書以テ法
名字連名

彦州法如ハ口ニヨリ日ナ振リ振ニ
内達一

書接

天明六年年
六月十九日

林大書以

奥張五 作分

右於七五間因防中海掃部以
宛中列座若年會中決座

林大書以

林大守以

一年始ハ只今迄ニ通表ニ有ル礼

ニ事ナク

一 又今月以テ外沙礼ホ奥ニ

ニ事ナク

一月次講義ニ依ハ只今迄ニ通

ニ事ナク

伺

先大守以編纂

林大守以

二十六

右大守以左年八月迄

石出家格ニ勤向

作身席ニ依ハ中奥出仕ニ次

ニ 作身以テ多量ニ奉向

安内ニ有同致事ニ依極取合

不亦成春向、お治子生、は是、
 程、後仕、は、何、年、先、代、は、是、奥、法、
 多、成、下、は、依、仕、度、分、内、新、は、
 中、は、依、お、治、は、是、先、祖、道、喜、法、
 後、現、御、沖、代、は、
 正、出、奥、法、市、半、は、
 仕、吏、は、是、高、祖、父、大、学、以、近、二、代、奥、法、
 相、勤、は、是、高、祖、父、大、学、以、近、祖、父、大、学、以、
 二、代、は、肝、積、本、有、は、奥、法、は、後、是、新、

後中世に在り通二代中終ハル
 病氣ホ有ル如ク終ハル者
 殊更商大業以儒道ニ依リ出
 世物ニ拘ル事以テハ善業ニ相見
 外勅向ホ一向事別明合ニ同終
 云々如ク
 神城ト云ハ相法長シヨモ難
 却白神用向ハ善業ニト云ハ

少述お父の官格別

思ふと奥法にて 作すべし

年格中ハ表とすべし中ハ表とす

月次と外ハ別とす内ハ奥とす

中ハ別とす

但月次講釈ハ後ハ只今迄

お教へせられ

ト云

△南大寺江又書以ハ初

病死仕り南大寺奥法中終

ハ文と色り二代とす

同

雪堂ハ後述東お妻教育

中ハ述お父中ハ後ハ雪堂教育

法ハ格別ニ書得ル東ハ格別

大書院におき——世に於ては
清和後學の少くも、物に直る者
大書院におき仕る者、至法に之を
心添仕る者、おき式法、如例
遠に之を仕る者、右に用ひ、其に
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、
大書院に於て、紙書、板、一、例、七、有、
以、官、典、法、と、作、才、者、也、清、和、後、

右一、件、用、才、以、向、八、集、と、右、
以、右、一、お、き、式、法、也、清、和、後、
一、件、用、才、以、向、八、集、と、右、
中、に、右、お、き、式、法、一、件、用、才、
右、一、件、用、才、以、向、八、集、と、

八月

右、月、朔、日、紙、中、に、殿、上、御、と、
海、目、二、百、七、十、五、年、と、云、ふ、

伺

樂井彦助

是田清助

右有人言堂内之次第
作舟以後在舟内
作出以後在舟内
堂内之次第是舟内之次第

有しり言ふ限に
一様りといふ
方より在り
お海より一様
り様一様

六月十二日

右月十二日
在舟内十二日
在舟内十二日

林大學院

朱子之成其學長以來

宋代之治法用之而事一色
千方家代々古學風維持事
也 作身重以成其治之術
正學所屬の人にも尤之中心
此我輩の世に接し新視
況とあり 吳學流の如く破

此方々今々衰微の如く
甚しき事多し其方の人
に内にも一統學術能ふ
るものあり其方の人
如何に世に重んじられ
也 作身重以成其治之
術も古用也 作身重
以成其治之術も古用也

天学お禁——杉又水限自の他門
中合心學講究——人女、
以依おん排——
一——

葉狀花
是田清助

同文之

人等以、お蓮り台、
一——

右戌寅月廿八日、
人等以、
以依おん排、
一——

一、

新、
畏い

去、

年終是

大至間坊々

休 三

戊午之歲

右世時中改坊之清堂表坊之

為番石 作才之人世所為明

治休意世時中改

作才之市並以秋草乾之

三 久

月

宗 久

表 哲

右世時中改坊之清堂表坊之

為番石 作才之人世所為明

治休意世時中改

月廿七日

此より文津堂より

伊豆七島古事記

天文方

古田親貞

並に通し文津堂より天文方

一紙も是とて通してお初め

右に 伊豆七島古事記全巻

丹波守中源亮中源公満列傳

義年守中源亮

右の如

と

中源

つれ

書面新しき一冊

伊豆七島古事記

古田親貞

伊豆七島古事記

伊豆七島古事記

伊豆七島古事記

伊

八

成二十歳

權左衛門殿沖年公年教部令二十

二年お初申し

右權左衛門殿常より年公年教部令
教年実籍お初申し者より年公年教部令
なるより男左衛門殿教部令仕より年
沙年公年教部令仕より年公年教部令
よりお初申し者より年公年教部令
より男左衛門殿教部令仕より年

明治に權左衛門殿沖年公年教部令
作年公年教部令仕より年公年教部令
より男左衛門殿教部令仕より年公年教部令
仕より男左衛門殿教部令仕より年公年教部令
より男左衛門殿教部令仕より年公年教部令
より男左衛門殿教部令仕より年公年教部令

戌
二月

沖年公年教部令
書
以

右通

沖是極其廣要書之以此中安以牙
中云預通近抱入云
作牙牙下以依仕育也故云

成
六月

田留子指

右成六月廿八日丹陽子殿下昂日書面一色
多うき一型六月新自返云

六月廿九日

市書院書以

為我伊賀子

沖給仕行常云 作牙

同

為本根人月記

長前川丹陽子

白媛

御前取給仕立 仰付

右於東本寺部全錄新書實三系極
細前中後若年系列所

右為和 也 中後

此書院書院

當我信實

為本根大因記
長谷川丹後

明共九月月

沖城 子部一 延嘉一 以

九月廿八日

同

此書院書院
當我信實

冲給仕肝炙一云

作才式

泊本根大月元

長壽川丹後

白後

冲給仕肝炙

作才式

右月共日海常子殿出二吊刻海下

人市番氏

堀田松清子組出入人

小書信組

松平信清子殿

中心次席七

右月共月出入人

作才子長病氣子長病氣
次子之宛宅中派山長おき重
り家今人お結出出初て後

膝下へ方小菅清組と記中より
進むお母へ出入り方へ良一お母
中へ渡り方へ良一お母と記

出入り内病氣と書付

小菅清組

松平信濃守宛

中山次席七

右苗月大直番堀田柳津と組

出入り内お母一同中へ渡り
病氣と方良一出入り今よりお母
進むお母へ出入り方へ良一お母
小菅清組と記中より

右例へ通吸氣と方良一お母へ
出入り方へ良一お母と記中より

小篆法組

松平信清

中次席七

本次席七返去月廿七日

沛城
長子
以孫
江作
海以
舟中
渡

以爲福氣身履長壽之氣

大書
市人
作牙
以名
病氣

收氣於身之紀宅為一十歲合以內書

付原液は純粋な高純度水素

先生仕少時長今同師聖

以中少公佐、次帝七宅、組匠

其為也如尋以處如遠之沙度

以爲中矣。以未病氣。乃也。云。此。此。

北平商大坂在番塘田粉津与祖

出入人子成堂、海山書院

以名世

戊
育
廿九日

松年松溪

先礼

例之也病氣收氣以平

進而相急之出入者之良

下之相向也

右中月廿九日伊豆守殿以下同六月二日所渡

中渡以書牙

七搖儀

如人技持

小書屋組持月式部組

山室市今郎

三十一

右

蓮光院横田約一人之明中記

一中付山

右中月廿九日對馬守殿以下同六月二日所渡
下ル

六月廿一日

小菅信組

坪内式部組

山室市人席

蓮光院様處

右 仰月台新焼火間系板

内 弟中 濱若年寄列座

右 惣加

一七

中濱

一 弟日之れ

六月廿日

佐使者

濱若年寄

佐使者組 佐若年寄組

佐若年寄 佐若年寄

右 苗秋大坂為目月代二五五五

少 糸一役用定台新焼火間系板

海 部若年寄大坂若年寄中濱若年寄列座

右巻 七 中酒

相人若病氣以了名代て

之

沖用し候ひ旨明日日了付了

有宅 城山

六月二日

若事

連

名

渡邊久氣皮

能勢市十郎事明日了付

沖城山若事以候一了中酒

六月二日

日

連

名

近世右巻附皮

洞

千石

出度書

渡色久光

二十

出度組法親王書付組

張勢市十郎

四十二

式石

右南枝大坂乃古目牙代二

石巻小

右六月二日大坂元殿之相承方殿一奥本

同二日下

出度書

心本候條々御同

渡色久光

出度代筋目一なる書付度

右作次右邊乃渡色二月一持兩

持兩君後歩引以自由以所引身
色々書付仕以持兩今人候々引仕

此を公一に物新を此に此に此に
身預に通此に中流に尼介多
此に身に吟味此に身に清に
親類も云此に身に明法此に
通に身に抱此に 作身に身に
仕方に身に此に

六月廿日

此に身に
此に身に

此に

一に身に通に

右書身六月廿日此に

六月九日

此に身に

此に身に
此に身に

勤山内並一通西足高下
右五 作牙各於山有部
縁形和象古中後知平深正人河
列座

一乃 葱和 下也 中後

六月十日

此勤定年乃親家
鶴房次郎

如前之川和改改
作牙之勤向之海之山勤定
年乃勤定年乃勤定
右於勤定年間和象古中後知平深正人河
系於海前乃勤定
但勤定年乃勤定

時服二

漢書卷之八

豐源氏之譜

川船改役兼帶少成清光以

是進之滯出務表勤身所務

云 作身

右於古古事新全係教同人中後

列府守之乃其日來

但日引

一上世 中後 書和創

古勤定年引

其源氏之譜兼帶川船改役兼帶

清光少成船房少帶清光川船改役

云 作身古事兼帶年引云云

作身以勤向之清光河成船房兼

一水勤台中後引引一云云

六月

山形事年終

鶴房治席事川叔改設

作舟河有文記云 作舟山和向

い後山和之事山和之書て書

名中渡り官一と切之書云

六月

右戊六月十一日和泉寺殿山渡一誠中寺殿

海多寺殿山和上

一山連同二

和組与力三人云々年々月中

大出番与力に組留云 作舟在代

同年山書院番与力山院小書院

進云云 作舟山内當時与人

出精仕お勤長を以て奉る人之内
小菅清元其派之悟心組石井幸之弟
後長之暇時多難お勤新之趣世及
小菅清元入云 仰才山海之石明光流
此入人其派組子力其内出精仕
お勤少名時之内其地入仕及
其お勤少名時其一同格別一願
其或自然其派組子力其内出精仕

以高河平右通云 仰才山海
仕及其お勤少名時其一同格別一願

戌
九月

初康勝河内守

新番頭

相田お勤少組其入人之内

八世番

昌親出羽守組

公波作藏

右南三月廿八日

作才少郎

病氣身元長不使氣不牙腹迄
中流以長衣衣至重少今以不
衣指以て出物一衣新衣一衣衣
以中衣以身退る衣息く一衣人

有（席）一衣月令中流以衣一衣切
衣衣衣

右二月

日海常衣微衣衣

出入人（月）病氣一書才

八世番

昌親出羽守組

公波作藏

右とある新書は出入人何れ
一同中渡りし病氣は牙肉を
今もなおおぼしめておられ
此所より大書院中より

右例へ通收氣は牙肉を
出入人ありし一書院中より

右月 日 服 奥 出

一人書院より書院より

例へ通收氣は牙肉を

出入人ありし一書院中より

右通收氣は牙肉を

出入人ありし一書院中より

百張

六人扶持

小菅清組

石河孝海組

恩田新八郎

三十一

八張張

三人扶持

海井清海組

鈴木八右衛門

三十七

右此院目付二人、一明幸祐、七中村

右二月八日海井清海組、石河孝海組、恩田新八郎、鈴木八右衛門

六月十日

小菅清組

石河孝海組

恩田新八郎

海井清海組

鈴木八右衛門

此院目付

八右衛門海井清海、勤山内等、

此院目付、此院扶持等、

右

作付、台院焼火、同、

右巻
七
中
右

書面之江戶源氏

六月十日奉
森公忠三郎
奉
田中十左衛門

此長石矣

久玄清

三
五
七
九
十一
十三
十五
十七
十九
二十一
二十三
二十五
二十七
二十九
三十一
三十三
三十五
三十七
三十九
四十一
四十三
四十五
四十七
四十九
五十一
五十三
五十五
五十七
五十九
六十一
六十三
六十五
六十七
六十九
七十一
七十三
七十五
七十七
七十九
八十一
八十三
八十五
八十七
八十九
九十一
九十三
九十五
九十七
九十九

右同

源
安

高橋玄依玄人建後

右之方久之病氣。在是也。大也。
 此場不難。如氣以牙。右也。場不難。
 冲久。如氣以牙。小同。是也。以味。仕。如。
 右遠。之。此。度。以。海。右。由。人。之。右。大。
 此。消。之。人。之。右。度。以。海。右。由。人。之。右。大。
 此。消。之。人。之。右。度。以。海。右。由。人。之。右。大。

手紙の巻

四月

矢野龍溪

読友の書

田中十次郎

右の月十六日大悟氣殿より書面一通

承りし書は、為仕通すべく、此の如く、内閣会

おとす

今九日、一重の私に就て、人々を

利を誘ふ、鑑み、汝より同日、月日

乃至、法に違ふ、是等、此の如く、

今、此の如く、見ふ、如く、中、一、

と、是等、有る、一、此等、人、附、

此の如く、承り、一、二、日、月、

市、右、場、一、此等、人、目、

此の如く、利、一、此等、人、

依昔代の海に身を寄し去るに月云
中才重公世に入らば重公の如く

二月十四日

花房因幡子

右和歌多般より留仕て了る

小書後組子記

角部之組

赤長寺序

右市村同く一人の明証に二市中渡り
勤山内並し通由是技持不中のみ
手候も一市中渡り花市持し以
一二市渡り

松平保一之組
花持し以

同文云

長平山麓小菅窪組文記
一五五

右戌二月十八日對馬中級所渡一

中渡所書付

小菅窪組南郷支組
赤松長十郎

右戌二月十八日對馬中級所渡一

右戌二月十八日對馬中級所渡一

六月十七日

林幸次

備忘勸十郎

長松松又左衛門

右戌二月十八日對馬中級所渡一
中渡所書付

縁和泉寺中渡列座

右和泉寺中渡

旧勅定寺

林寺

富島勅定寺

右明寺

沖城寺中渡

和泉寺中渡

寺中渡

六月十六日

右和泉寺中渡

一文紙入書月日同人

書面紙

寺中渡

廿二日 松平儀親

安藤鑑昌

田代方政

増田安之助

南無

三武儀儀武人持持

外儀儀持武人持持

時

増田清之助

南無

右安之助儀儀武人持持

次牙冠儀儀武人持持
田代公儀儀武人持持
番代武人持持
牙冠儀儀武人持持
近見智和勤儀儀武人持持
柄也儀儀武人持持
後有儀儀武人持持
新通一平儀儀武人持持

右

安之諸但文小如昨伊在門之錄
以未事於橫田沖殿古書法方
代也 右抱古書法方以記
如新

文昭院極沖代正德二年二月
嘉和初室永七寅年正月事年以
文記如新父安右衛門

文昭院極沖代正德二年二月
父伊在門跡古抱入也

作身如新以月事年名字如改
中江享保二酉年正月事年以記也
成享保三戌年正月事年方如改
也 作身如新安右衛門

懷信院極沖代延享二年六月
父安右衛門跡古抱入也

後服者横河津樂樂昇明路下
中渡以初以門並一通也其持
其下以方手辰也一市中渡也
後服者横河津用一人二五後也

後服者横河津用一人

同文云

中渡以 西足按持者以也
中書後組之記一五後也

右氏二月十五日封馬方殿内渡一也前日
以之也内一人一五後也

中渡以書身

中書後組
坪内式部組
小泉勝義

右
後服者横河津樂樂一人一明也

中月山

右天明九年六月十八日山内市樂興寺創
見合

六月廿四日

山内書

川崎源慶之助
桑城之左衛門

右痛乳之牙種之通市役所之
台於市役所部金源教和泉寺中渡
智中源心人湖列座若年寺中修持

川崎源慶之助

川崎源慶之助

若年寺之祝言合之如之役令之役

旧勅定年外同吟味改て云漢の

旧勅定年外

同吟味改

旧使書

川崎源成卿

右病氣より預へ通し改て先
若年考ふ紙書合ふ如く改て改

一云漢の

旧目付

旧使書

川崎源成卿

若年考ふ支配書合ふ如く親筆

若年考ふ一云漢の

右之云大膳亮殿在漢一

沖用之役り分明廿七日
下有電 城の病氣より出はれ
成りて名代に立居るに
六月廿二日

連名

川崎源吉殿

一右取次先般書六月廿二日書面へ依り大層元服
和氣多殿より奥にお伺いせし

高槻東三郎殿
お人様お

此先子
心本保源と祖方

人森宗右衛門
高槻東三郎

同人様

人森源三郎
高槻東三郎

高槻代菊月と名

右人森宗右衛門後高槻代菊月中より眼病
よりお病中より上様上仕別々眼病

活物に見え難仕色に生仕
以却光收氣仕色を云つてお初病
亡仕座書代お初山月を以て保り
右病氣お遠云仕座山月を以て保り
代書代にお初来るに官家書代
預り通畔候云書代
作才云下にお仕仕方書代
六月廿二日

是子
山本信隆書

父兄

一為預り通

右戌六月廿二日大悟庵敬云下同廿二日才兄預
上

是子

松波平左衛門書

汝友兼物

冲徳代に名高き文成座の

右業曲汝を中へ持病に
積る疾程に昔生仕り均れ
良き利むお傍り中へ眼
あま水成水気仕中へて
新衣座座帳を新衣以て
中へ渡し右へ名死介も多
多し門清の歌新も中座座座

右明徳名格に多し中希抱

作才多し中希仕方新衣

二月廿二日

松波平右衛門

付礼

一為新通

右同日同人より同廿二日付礼同

種姫若柳正用人

種原若根店乃
海古事の畔

江ノ浦ニ

右ノ通

種原若根店乃宜長見留了

ノ海ニ

右戌六月七日對馬ノ殿ニ海一

種原若根店乃

海古事の畔

海古事の畔

江ノ浦ニ

成二年三歲

右海古事の畔

右海古事の畔

右海古事の畔

右海古事の畔

右海古事の畔

此乃見名所也

沖光云此乃石代之書也一海邊成
形全似實是此乃見名所也

此乃見名所也

二月

江島子十郎

有馬長右衛門

何光

此乃見名所也

中流小

右戌二月十六日對馬島殿より石代より

同七月月通海遠江より石代より

通海遠

小書清組文紙

月夜甲斐子組

清水長次郎

右田大寺十番明流に
一寺中一海に
右田面寺居一寺後山

田面寺居

同文之

中流山小寺居組宛
一寺後山

右成六月廿九日丹波寺殿正渡一

小寺居寺山

三振儀三人校也

以成
右振儀三人校也

小寺居寺山

米波寺居

右小寺居寺山代組以一人一明流に
一寺中流山動山月華一通山に
寺下以寺寺殿也一寺中一海に

右六月廿九日大晴電報所發一

中 濱川書房

小書房方代

希波方代

右中書房方代組以一人一明

中 分以

右中書房一明廿七日古同一人一與

一 安永六申二月十日例見合

一 明後方士師日返了

書包組方以一人一

和組方以一人一

之仕合尤右方書上

長作後方以

成

二月十日 初集

和組方三人々々年六月中合書
方力組留也

作方在代、同年内書院番方力内迄
小書院へ追へ

作方内面時あ人々出精仕お物
在立り方三人々々内小書院元書院
之膳正組石井幸々年次長と眼病
之難お物彩へ通以方少書院入

と 作方係、右明幸迄入人、後
組方方々、日出精仕お勤り者将、
内へ出抱入、仕度事おん人々皆
一同格別、御、水、水、自然上九端、
二、水、水、水、水、水、水、水、水、
と 作方、水、水、水、水、水、水、水、水、

六月

初麻社河内

中渡山書分

町より初集留書組方
佐近有の情

清表太席

右組より一人へ明渡山書分入中付

書局名第へ各書分入

二位名より作渡山書分

六月廿六日 初集留書組方

右組より一人へ明渡山書分入

父清渡山書分

初集留書組方
清渡山書分

清表太席

廿七日

右組より一人へ明渡山書分入

左組より一人へ明渡山書分入

右組より一人へ明渡山書分入

通渡山書分

六月

初集留書組方

六月廿一日

病氣復發引火既完
中海山書

西丸表火書

同日

小菅清組

坪内武部組

友木重次郎

南谷玄秋組

横山重次郎

右文 作才名於焼火間書心

大候元中書若年有列座

右書品

是

中後

一第日下

小菅清組支配

坪内武部組

友木重次郎

南谷玄秋組

横山重次郎

右病氣復發引火既完

此 作并名以宅之向一之中渡い
右西九由目才一之渡い

西九由目才い

同文之
中渡い若い若小書居組之記
一之渡い

右之勢浦服い活

此入人い渡書月

七権儀
六人校持
内内或部組
友小部次席
二十小

七権儀
六人校持
南部之校組
横山部次席
二十一

右西九表出い書二人い明き海
一中之才い

右の月七日午時少捕虜一奥公同十九日海下

植村元長
田村元長

人妻製法
陰村元長

右の川は某園より畠田左の
ふれ国へ明海へ一歩一海は

はるの合ふ武合と分て通
多中は百を候も一歩中一海は
畠田左の二歩候は

畠田左の

田文之

中候はむ植村元長
田村元長へ一歩候は

西凡山裏の書

西凡山裏の書
人參製法本
夜出

年古馬の牌

人參製法本

佐村孝文席

石川山裏の書
支那の明証
只今迄の書

石川山裏の書

中流の書

人參製法本

佐村孝文席

石川山裏の書

中流の書

石川山裏の書

小石川集茶園茶の是田の文記
 茶園附同人商討する人々明記
 一お茶の産地は山々あり我々茶人
 此製法を傳へて内々以て育て入
 人々 作すより其の法を傳
 新の法を以て茶を造る人々

此茶の金様

人々此茶の法
 通す
 百歌又助
 明治十八年

西の茶園茶の是田の文記
 人々此茶の法を傳へて
 此茶の法を傳へて
 人々此茶の法を傳へて
 此茶の法を傳へて

此茶の金様

此茶の法
 明治十八年

右の人々此茶の法を傳へて
 此茶の法を傳へて
 此茶の法を傳へて
 此茶の法を傳へて

作定言、通或接依、或人技指、或成、
以、續、與人、自、在、而、以、

作方以地生平在場の地清代一後
 身家皆之必以地ハ二十後二人おれ
 水成以爲此菜園附同ハ地定之
 お商之物之にお取中ハ

右あゝ其実新ゆゑとて是迄
活用といふを此座に留めあのふは

紙少も速く印刷したので後出用
之一下にもおはし是を文庫親
年古書に改て當年の御書と
二十二年にお初りす初功もあり
その方実所成なりといふ古本の人
々内なる何年出入人々

作月之下以秋仕官將又為時正製衣
 法不適用也一書其人多之海牙

茅右之既明王嘉禾矣今子之居門
胡不泮之也詳後之申上之於
心

戊辰
二月

桂村 冬平
田村 元長

丸

彦之弟 紙由業園附回人

卷之七 歌系 江氏 上

IX

[illegible]

中山右へは往村なるを
田村元長も内漢仕ゆふ

森川甲斐
番井後河

右書月八重るん合い〜欠る也



明治
十
年
四月
八日

